

CONTENTS

最終回 水生生物との関わり
ウシモツゴ 古田正美 2

特集 地域社会と建築をつなぐもの 1
プロポーザルの現状を見る 吉村昭範 4

JIA 東海支部 会員集会 アンケート集計結果と討論会 6

JIA 静岡発 第1回建築ウォッチング+ワインの夕べ
静岡ガス本社ビル<冬モード>の見学と料理教室 鈴木俊史 9

JIA 静岡発 空間デザインワークショップ 「小人の空間とヒトの空間、巨人の空間」
～木の空間とスケールのデザイン遊び 石橋 剛 10

JIA 愛知発 事業委員会 紙コップとダンボールカードを使った造形ワークショップ ... 間瀬高歩 11

JIA 愛知発 GC賞作品集と発表交流会 名古屋から発信する「建築と子供たち」... 鈴木賢一 12

JIA 愛知発 法人協力会 2015年新年会・CPD研修会と商品展示会を開催... 山本義和 14

JIA 三重発 会員研修会 LEDの現在地 森本雅史 15

第31回 JIA 東海支部設計競技「特定秘密保護住宅」 金賞受賞者の声
住田百合那 市川雅也・久保田貴大 16

▶東北からのメッセージ
地域の「逃げ地図」WSを通じ職能生かす 羽鳥達也 18

▶東海の減災を考える
地中埋設管の被害を考える 野中俊宏 19

保存情報160 朝日町資料館(旧朝日町役場) 林 廣伸 20
明治用水旧堰堤(えんてい) 鈴木祥司 20

理事会レポート 石田 壽 21

東海支部役員会報告 車戸慎夫 22

東海とっておきガイド ⑦⑥ 静岡編 渡辺 隆 23

地域会だより 23

法人協力会通信⑮ (株岡村製作所) 小玉真澄 24

編集後記 西川光広・伊藤彰彦 24

Intuition XII

ルーフハイ



ついにこの表紙シリーズも最終回。表紙デザインを試しながら1年の感想は次回に書かせていただくとして、縮めの写真はどうか。悩んでいると知人から情報が届く。さっそく、岐阜のとある河川敷へ車を走らせる。堤防を越えると、いきなりこの小屋は現れた。「おお!これは良い」おもわず声が出る。

今はもうほとんど使われていない、丸太足場用の丸太を立てかけて保管する収納小屋。高さ、立て掛けるための角度、そして、木材ゆえに雨をある程度防ぐための大きく張り出した屋根が必要となったことは容易に想像がつく。この機能によって決まったフォルム、ちょっと普段は感じるのではない迫力があり、どこか痛快ささえある。中間域に設置された底さえかっこよく見えるから不思議である。もちろん、立てかけられる丸太の下の空間も無駄なく活用されている。意匠など眼中にない、徹底した機能主義。けれども、ここまで彫刻的な形をしたものはそうはない。

周囲は貸し菜園になっており、この小屋だけが異様に背が高い存在になっているためか、お祭りの山車のような非日常的迫力、拵組で大きく張り出した社寺の屋根が持つ威厳といった感じがしてしまう。ふと昔流行ったフォーリーを思い出してしまった。丸太足場全盛の頃はこんな小屋が結構点在していたのだろうか？

一つの景観的特徴になっていたかもしれない。

横関浩 | STANDS ARCHITECTS





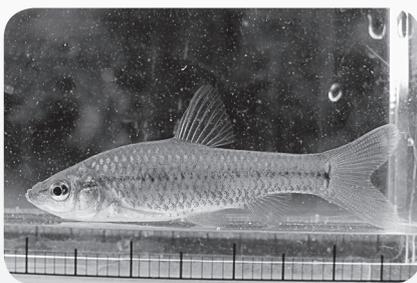
最終回は身近な溜め池からのお話です。「ウシモツゴ」と言われても何か判らない方がほとんどではないでしょうか？ この魚は環境省のレッドデータブックに絶滅危惧種ⅠA類にリストアップされており、公益社団法人日本動物園水族館協会で保全と保護繁殖の対象になっている淡水魚ですが、私自身も魚名を知っている程度でした。

三重県では1カ所を除き絶滅したと思われていましたので、1997年に伊勢市内の極めて小さな溜め池で発見されたときには驚きました。発見の経緯は、私の知人が大型の熱帯魚を自宅で飼育しており、そのエサのアメリカザリガニを捕獲していた私有池から副産物として持ち込まれたものでした。知人と池の所有者は以前から「この魚」の存在を知っていましたが、希少な絶滅危惧種とは知らずに自宅の小さな水槽で飼育していました。新種や希少種の発見は、地元住民や漁師さんが昔から知っていても研究者は知らずに、このように見つかることがしばしばあります。(注：絶滅危惧種ⅠA類とは「ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの」と定義されています。)

◎ ウシモツゴとは

ウシモツゴは濃尾・岡崎平野を中心に広く生息していましたが、環境の悪化やブラックバス、ブルーギルなどの外来種の侵入によって捕食され、著しく減少している日本固有の

淡水魚の一つです。大きくなっても体長7cmと小さく、寿命は2歳ほどで、まれに3歳がいるくらいで世代交代の短い魚です。自然下では豊田市、日進市、多治見市、美濃市、関市、岐阜市、伊勢市、渡会町に生息しています。残念ながら、犬山市、小牧市、春日井市、西尾市、岡崎市、養老町、大垣市では絶滅したようです。桑名市にも生息していましたが、1950年以降の発見はなく絶滅したと考えられています。



ウシモツゴ

近縁の仲間にはモツゴがありますが体型が異なり、本種は東北・信越地方に生息するシナイモツゴの亜種として扱われています。和名は「ウシモツゴ」と付けられていますが、学名は未だにありません。まもなく世界共通の学名が付けられる予定です。

この魚は、環境省のレッドデータブックだけでなく、生息している三重・愛知・岐阜の各県のレッドデータブックにも掲載されています。池主であっても許可なく捕獲し、持ち帰ると処罰されます。

◎ 調査研究

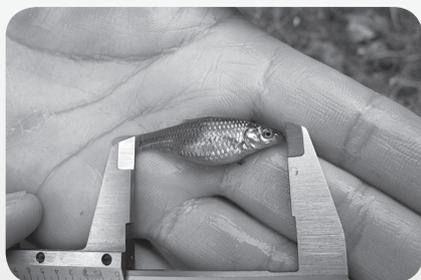
(公益) 日本動物園水族館協会の生

物多様性委員会・種保存事業部のコレクションプランではウシモツゴを含む17種類の日本産淡水魚に関わる行動計画と繁殖マニュアルを作成しています。このような状況下で鳥羽水族館は1997年の発見からウシモツゴが生息している町の自治会と共に細々と調査活動をしてきました。ただ、私たちの活動だけでは限界があり、2010年の春に三重県総合博物館、三重大学そして三重県森林環境部を交えて地元自治会と共に、「伊勢のウシモツゴを守る会」を発足して本格的な生息数の調査と研究を開始しました。調査は水温が低くウシモツゴの活動が少ない12月～3月の冬季を除き、少なくとも月1回の採集を行い、繁殖と成長、水温の調査など地道な活動を続けています。2014年には、期間展示ですが三重県総合博物館で鳥羽水族館生まれの生体の展示と解説パネルで研究報告を行いました。

私たちが発見したウシモツゴのいる池は2つで、共に20m×15m×1m以下と小さく昔から農業用の溜め池として利用されていました。現在では休耕田の増加で利用されておらず、山里に放置され地元民にも忘れられた池となっています。また、過去には池周辺は里山として機能していたようですが、竹林に覆われ笹や落ち葉さらには雑木の枯れ枝で埋まり、土砂の流入も加わり池は浅くなってきています。

1997年の発見から、私たちはウシ

モツゴの調査と池を守るために採捕調査を行ってきましたが、年々生息数の減少傾向が著しくなってきました。万が一の絶滅を考え、池の調査と並行して生息域外の保全活動として、鳥羽水族館では1つの池のウシモツゴを繁殖の対象として取り組んだ結果（遺伝子の攪乱を起こさせないために1つの池のウシモツゴを飼育しています）、飼育下で増殖させることができました。2006年以降は、鳥羽水族館で繁殖させている個体群がいた池のウシモツゴは全く採捕できなくなり、2011年に絶滅したと判断しました。もう一方の池は細々ではありますが生息しています。私たちの調査活動は、採集した魚の大きさや可能な限り雌雄を判別し、写真などの記録をした後に採捕したそれぞれの池へ戻しています。野生個体の生存している池では、再捕率から生息数を推定するために、個体識別用の色素を皮下に入れていきます。



体長の計測

◎ 保護・保全活動

私たちの保護と保全の活動は繁殖や研究だけでなく、池底の掃除や周辺の整備も行っています。過去には、池の周辺は里山として住民の方々が整備していましたが、今では竹林や雑木林に覆われて、人の通る道がなくなっているのが現状です。池は落ち葉などで水質が悪化し、池の周囲は台風による倒木（竹）で環境の荒

廃が進んでいます。

現在は「伊勢のウシモツゴを守る会」が中心になって、三重大学の学生や三重県総合博物館のサポーターの方々などと共に倒木（竹）を除去し、池周辺の環境整備をするなど、生き物が住みやすい里山を再現しようと活動を続けています。



池の周辺整備（伐採）

また、この池がある町の自治会や池主と会合を持ち、（公益）日本動物園水族館協会の野生動物保護活動助成事業の資金援助を受けて、2010年秋には池主が所有する休耕田を新しく池（10m × 10m × 1m）に造成し、2011年春に鳥羽水族館で繁殖したウシモツゴの10ペアを放流しました。新池へはウシモツゴの野生生息池と同じ水が流入し、陽あたりの環境も良く世代交代が順調に進み、生息数は飛躍的に増えています。



休耕田を池に造成

2011年7月には絶滅したと判断された池の清掃を行い、鳥羽水族館で繁殖した稚魚を野生復帰しました。その後の調査では、嬉しいことに放流魚の成長と世代交代が確認されています。



池の清掃

これらの池の周辺は、メダカはもちろんのことトノサマガエル、ダルマガエル、ニホンイシガメ、ホトケドジョウ、ヤリタナゴ、ヘイケホタルなど多様な生き物が生息する自然豊かな地域です。この町の人々は自然に関心が高く、自治会の役員や学校の先生のOBが主体となり、毎年6月下旬にはホタルの観察会を、8月の第1土曜日には小学生や幼稚園児たちを対象に田んぼや水路の生き物たちの観察会を行っています。私は、水族館の飼育員と共に12年前からそのお手伝いをさせていただいています。

私は、昨年8月下旬に43年間勤めた鳥羽水族館を退職しましたが、本誌「水生動物との関わり」の第1回で紹介しました伊勢湾・三河湾に生息するスナメリや地域の自然環境とウシモツゴに関わって、保護・保全の活動を次の世代へ繋いでいこうと思っています。

今回はウシモツゴを守る目的で、生息地の町名を伏せさせていただきました、ご了承下さい。（了）

ふるた・まさみ

鳥羽水族館 元館長（公社）日本動物園水族館協会友
昭和23年（1948年）生まれ。三重県立大学水産学部卒。
専門は水生動物の飼育と研究。

著書に「いたずらっこのチャチャ」（学研）、「海獣水族館」（共著 東海大学出版会）、スナメリ（共著 月刊海洋2003年8月号）など。他「スナメリの飼育と繁殖」（海洋と生物2008年2月号）、「スナメリ飼育の歴史」（海洋と生物）、「海洋と生物」（2014年2月、4月号）など多数雑誌に寄稿。

2014年は、「愛知県美浜町宮河和団地」の基本設計競技や松阪市の「新健康センター」と「こども発達総合支援施設」の設計競技で、若手建築家がコンペティションを勝ち取った。東海地域では近年にない珍しい動向であり、ほかの若手の建築家にとっても刺激になることであっただろうし、このような状況が今後も続いてほしいと多くの建築家が思っているのではないだろうか。

しかし、大多数の行政が行うプロポーザルには若手建築家が参加できる機会はまだまだ少ない。その状況については名古屋市立大学教授の伊藤恭行氏が本誌2014年11月号で論文「若者に公共建築設計のチャンス」のなかで詳細にコメントされているので、そちらを参照されたい。伊藤氏が書いているように、プロポーザルの参加要件で同種・類似業務の実績が問われることの多い現在の状況では、若手の建築家がキャリアを積むためにチャンスを求めても、構造的にチャンスそのものが与えられない。

多くの建築家が、住宅の設計などのキャリアを経た後は、さらに公共建築という「より地域社会との関連性が深い建築」の設計に仕事を広げたいと思うだろう、しかし、プロポーザルの敷居が高い状況にあって、とりわけ、若手の建築家にはどのような打開策があるのだろうか。

普通では応募することの難しいプロポーザルにどのように参加することを模索しているのか？あるいは、プロポーザルなどではなく地域の市民とワークショップのような形で関係を築き上げることでアプローチする方法や、むしろ大きな公共建築でなく住宅や小規模の設計にこそ地域とつながる可能性を見ているのか？

これらの 이슈について「地域社会と建築をつなぐもの」特集で、東海エリアの若手建築家の意見を論じたいと思う。



まず今号では、公共建築へのステップとして従来からもっともオーソドックスなプロセスとして考えられてきたプロポーザルについて、先述した状況が実際にどのようなものであるかをデータで検証してみたいと思う。

右の表は過去3年間のプロポーザルの結果をまとめたシートである。「組織設計事務所」「アトリエ系設計事務所」「コンサルタント会社」に大別して、プロポーザルに勝った事務所の数を記入した。右下欄にあるように、3年間の全国の累計では、プロポーザルの3割程度が施設の基本計画策定業務や調査の業務であり、その残りがいわゆる設計競技に該当するものである(2012年、2013年は東日本大震災の影響もあって、ともに700件以上のプロポーザルがあったのに対し2014年ではおよそ半分に減少している)。

プロポーザル全体の62.9%の勝者が組織設計事務所であり、ア

トリエ系設計事務所が勝ったのは、実に少なく8.1%である。東海地区で見ると、コンサル29.1%、組織60.8%であり、アトリエ系は10.1%と、意外に全国平均よりも少し高い数字である。ほかのエリアと比較すると、アトリエ系が特に少ないのが四国と沖縄地域で両者は2%台である。震災の影響があった東北エリアではアトリエ系が奮闘し、15%もあったのが興味深い。また、中国地方も9.7%と全国平均よりも高い数字が出ているのは、広島を中心に建築家が活躍していることを示しているように思える。

アトリエ系事務所と十把一絡げに言っても実際はさまざまな事務所があり、プロポーザルで勝利するのは、実績のあるベテランの建築家の事務所が多い。若手の建築家(40歳程度まで?)が勝ち取ったのは、この3年間の全国の勝者147のうち、おそらく20程度しかないのであろう。全体1,800余りのプロポーザルのなかの20であるから、割合にするとおよそ1%分なのである。1%でも実例があるだけ良いではないかという見方もあるが、この数字を見てしまうと、学生など、のこれから建築家を目指そうとする若者がプロポーザルを実績のきっかけにすることは、なかなかイメージが湧かないのではないだろうか。



一方で、若手建築家が参入している事例のなかでは、ベテランの設計事務所や組織設計事務所とチームを組んで設計共同体(JV)の形でエントリーしているのも少なくない。これは若手に限らず行われている方法で、実績のない事務所がそれのある事務所とチームを組むことでお互いの長所短所を補い合ってチームづくりに意義がある。<発想力もしくは実績のある他県事務所+登録できる地元事務所>という形が従来からある方法だが、それだけでなく今後は<組織+若手>の組み合わせの設計共同体がもっと組みやすいような仕組みがつけられると良いのではないだろうかと思う。釜石市災害復興公営住宅のプロポーザルでアーキエイドのような設計事務所ではない建築家ネットワークが勝利した事例などは非常に興味深い。

プロポーザルから実績を積み上げるのは確かに難しい状況である。この状況を少しでも良くするためには、プロポーザルを行う上で、施設の基本計画策定の段階で門戸を開くことに積極的なコンサルタント会社がかかわることが大事なのではないかと思う。また、何よりも審査員に関して、学識者でも良いし建築家が審査員でも良いが、実績よりも提案で選ぶことのできる審査員がもっと増えてほしいと思う。

吉村昭範 | D.I.G Architects



プロポーザル勝者分布リスト

地域	支庁	2012						2013						2014								
		組織	JV (組)	JV (ア)	アトリエ	コンサル	その他※	組織	JV (組)	JV (ア)	アトリエ	コンサル	その他※	組織	JV (組)	JV (ア)	アトリエ	コンサル	その他※			
		組織事務所系		アトリエ系		コンサル系		組織事務所系		アトリエ系		コンサル系		組織事務所系		アトリエ系		コンサル系				
北海道	北海道	17	4	1	4	2	0	28	15	3	1	3	4	0	26	7	1	2	2	1	13	
	%	60.7%	14.3%	3.6%	14.3%	7.1%	0.0%		57.7%	11.5%	3.8%	11.5%	15.4%	0.0%		53.8%	7.7%	0.0%	15.4%	15.4%	7.7%	
	計	21			5			28	18			4			26	8			2		3	13
	3年分																					67
	%	75.0%			17.9%				69.2%			15.4%			15.4%	61.5%			15.4%		23.1%	
東北	青森	2	0		2	0	1	5	5	0		0	2	0	7	7	1		0	1	0	9
	岩手	1	1	1	3	7	7	20	7	2	2	1	4	3	19	2	0		0	3	2	7
	宮城	11	0		5	22	7	45	16	1	1	5	7	7	37	6	4	1	1	4	1	17
	秋田	1	3		0	1	0	5	1	3		3	1	0	8	1	0		0	3	0	4
	山形	4	1	1	3	0	0	9	1	1		0	0	0	2	1	0	1	0	0	0	2
福島	10	1	1	2	4	5	23	15	0	1	1	1	3	21	2	3		2	0	0	7	
計	29	6	3	15	34	20	107	45	7	4	10	15	13	94	19	8	2	3	11	3	46	
%	27.1%	5.6%	2.8%	14.0%	31.8%	18.7%		47.9%	7.4%	4.3%	10.6%	16.0%	13.8%		41.3%	17.4%	4.3%	6.5%	23.9%	6.5%		
計	35		18		54		107	52		14		28		94	27		5		14		46	
3年分																					247	
%																						
関東	茨城	15	1	2	3	1	5	27	22	2		3	2	0	29	3	1		0	0	1	5
	栃木	2	2		0	3	0	7	7	2		0	1	0	10	1	3		0	0	0	4
	群馬	3	0		2	1	2	8	3	0		1	0	0	4	1	0		0	0	0	1
	埼玉	5	0		2	1	0	8	8	1		0	3	2	14	3	0		0	0	0	3
	千葉	11	0		1	3	4	19	18	0	1	1	4	1	25	10	0		0	3	4	17
東京	42	2		5	6	7	62	74	2		6	14	9	105	38	0		3	15	5	61	
神奈川	13	2		2	5	3	25	7	4	1	2	6	5	25	7	0		3	15	5	17	
計	91	7	2	15	20	21	156	139	11	2	13	30	17	212	63	4	0	4	22	15	108	
%	58.3%	4.5%	1.3%	9.6%	12.8%	13.5%		65.6%	5.2%	0.9%	6.1%	14.2%	8.0%		58.3%	3.7%	0.0%	3.7%	20.4%	13.9%		
計	98		17		41		156	150		15		47		212	67		4		37		108	
3年分																					476	
%																						
北陸	新潟	21	3		0	5	0	29	11	5		0	2	0	18	5	1		1	1	0	8
	富山	13	1		1	0	0	15	4	1		2	0	1	8	1	0		0	0	0	1
	石川	3	1		0	0	0	4	3	0		0	0	0	3	1	0		0	0	0	1
	福井	3	4		0	0	0	7	3	4		1	1	0	9	1	0		1	3	0	5
	計	40	9	0	1	5	0	55	21	10	0	3	3	1	38	8	1	0	2	4	0	15
%	72.7%	16.4%	0.0%	1.8%	9.1%	0.0%		55.3%	26.3%	0.0%	7.9%	7.9%	2.6%		53.3%	6.7%	0.0%	13.3%	26.7%	0.0%		
計	49		1		5		55	31		3		4		38	9		2		4		15	
3年分																					108	
%																						
甲信越	山梨	3	0		0	0	1	4	1	0		0	2	0	3	1	1		0	1	0	3
	長野	5	2		1	0	0	8	7	2		1	0	1	11	3	0		0	2	0	5
	計	8	2	0	1	0	1	12	8	2	0	1	2	1	14	4	1	0	0	3	0	8
	%	66.7%	16.7%	0.0%	8.3%	0.0%	8.3%		57.1%	14.3%	0.0%	7.1%	14.3%	7.1%		50.0%	12.5%	0.0%	0.0%	37.5%	0.0%	
	計	10		1		1		12	10		1		3		14	5		0		3		8
3年分																					34	
%																						
東海	岐阜	1	2		1	1	1	6	3	0	1	1	2	1	8	0	1	1	0	4	0	6
	静岡	16	2		3	0	0	21	3	0		1	3	1	8	5	0	1	0	2	1	9
	愛知	22	0		3	2	3	30	7	0		1	7	6	21	10	1		1	2	1	15
	三重	8	0		0	2	1	11	11	0		1	3	0	15	4	0		1	3	0	8
	計	47	4	0	7	5	5	68	24	0	1	4	15	8	52	19	2	2	2	11	2	38
%	69.1%	5.9%	0.0%	10.3%	7.4%	7.4%		46.2%	0.0%	1.9%	7.7%	28.8%	15.4%		50.0%	5.3%	5.3%	5.3%	28.9%	5.3%		
計	51		7		10		68	24		5		23		52	21		4		13		38	
3年分																					158	
%																						
近畿	滋賀	7	1		1	4	1	14	5	0		2	5	2	14	1	0		0	1	0	2
	京都	26	0		2	4	1	33	20	0		0	3	4	27	9	0		1	5	1	16
	大阪	6	1		0	2	8	17	19	2		0	9	6	36	3	0		0	3	4	10
	兵庫	12	1		0	2	2	17	8	1		0	12	3	24	3	0		0	1	3	7
	奈良	6	0		0	3	6	15	8	0		1	8	2	19	2	0		0	0	3	5
和歌山	3	0		1	0	0	4	0	0		0	1	0	1	1	0		1	0	1	3	
計	60	3	0	4	15	18	100	60	3	0	3	38	17	121	19	0	0	2	10	12	43	
%	60.0%	3.0%	0.0%	4.0%	15.0%	18.0%		49.6%	2.5%	0.0%	2.5%	31.4%	14.1%		44.2%	0.0%	0.0%	4.7%	23.3%	27.9%		
計	63		4		33		100	63		3		55		121	19		2		22		43	
3年分																					264	
%																						
中国	鳥取	2	1	0	0	0	0	3	1	1	0	0	1	0	3	0	1	0	0	0	0	1
	島根	0	2	0	1	0	0	3	4	1	1	0	0	0	6	0	0		0	0	0	
	岡山	5	0	1	0	2	0	8	5	2	0	1	0	0	8	2	1	0	0	1	0	4
	広島	4	3	2	0	1	1	11	10	0	0	1	1	2	14	5	1	0	2	1	3	12
	山口	7	2	0	0	7	1	17	8	3	0	2	2	1	16	5	1	0	0	1	0	7
計	18	8	3	1	10	2	42	28	7	1	4	4	3	47	12	4	0	2	3	3	24	
%	42.9%	19.1%	7.1%	2.4%	23.8%	4.8%		59.6%	14.9%	2.1%	8.5%	8.5%	6.4%		50.0%	16.7%	0.0%	8.3%	12.5%	12.5%		
計	26		4		12		42	35		5		7		47	16		2		6		24	
3年分																					113	
%																						
四国	徳島	8	0	1	0	2	0	11	4	0		0	1	0	5	2	0		0	1	0	3
	香川	11	2		0	2	0	15	5	1		0	4	0	10	0	1		0			

JIA 東海支部 会員集会 アンケート集計結果と討論会

建築家資格制度について考える 「JIA 正会員」は全員「登録建築家」に

昨年12月16日の会員集会で会員の闊達な討論がされ、参加者42名中29名のアンケート回答が収集できました。そのアンケート結果、当日の討論会は、支部会員の多数意見とは言えず、まだ埋もれた意見が多くあると思われ、支部として意見集約できたわけではないですが、非常に有意義な発言も含まれています。公益社団法人としてのJIAはどこに進んでいくのか、建築家として歩む道はどこか。広く会員皆様の「正会員ルート」に対する考察の資料となるよう、また東海支部の一部意見ですがそれを支部会員および全国会員にも伝達できるよう、ここに記載します。

記：鈴木祥司／東海支部建築家資格制度委員長

●アンケート集計結果 (提出者数29人)

①「JIA 正会員ルート」の提案内容をご理解できましたか。

・良く解りました	13
・おおよそ解りました	15
・わずかに解りました	1
・いいえ	

②「JIA 正会員ルート」の提案に賛成ですか。

・賛成	20
・仕方ないが賛成	5
・いやだけど従う	1
・反対したい	1
・絶対反対	

③「JIA 正会員ルート」の提案の進行

・どんどん進行していくべき	11
・このままのペースで進めていけばよい	10
・もっと時間をかけて議論を煮詰めていくべき	7
・わからない	1

<アンケート内ご意見>

- ・将来像・スケジュールなどをおおまかでも示すべきである。今後は地域会・支部での議論を進めていくべき。あくまでも会員・個人が考えていくべきこと。会員の意識を高めていく手助けは本部も考えていくべきである。
- ・まずは、登録建築家制度（現状）を整えてから、全会員に呼びかけるべき。
- ・今は良い時と思い、声なき会員の発言を引出して、大論議の末、発車すれば良い。
- ・UIA アコードに則したJIA 定款の改正をしていく。

- ・ JIA 正会員でTK（登録建築家）になり、海外の業務受注を視野に入れた活動指針の作成（ただし、日本と他国とのTPP協定の締結が必要）を考える。
- ・ 公益性への担保という観点から、もっと社会活動、奉仕活動をして、社会の中での位置を認めてもらう（CPD単位の認定取得を改めて考える）。
- ・ わかりやすい説明で内容は理解できました。JIAの本来の姿になるのではと認識しています。まずスタートして、問題が出てきた時点で考えていけばいいのではないですか。UIAアコードの解釈は大変難しいと思います。また、日本（国）などの事情を考えて理解していくべきで、運用は独自性があっても良い。
- ・ 市民・行政に説明しやすい制度の確立を希望します。
- ・ 会員減少のことは心配しないで実行すべき。痛みを耐えて再生しなければ社会に認められないと思う。
- ・ 建築家制度（国家資格）への取り組み方、またはJIAとしてのVISIONが見えないままの進行は非常に不安を感じると共に、JIAへの不信につながると思う。
- ・ 説明会を入念に行えば時間を必要以上にかかる必要はない。
- ・ 外から見て理解してもらえるかどうか。
- ・ JIA 正会員など、名称が会員資格も含め多すぎる。
- ・ JIAに現在必要なのは、明確な目標（今後説明とのことでしたが）とそれに近づく力強いプロセスだと思います。結果よりも今可能なプロセスを進めてゆくことを支持します。
- ・ 一般の方にとってわかりやすい状態に統一すべきだと思います。建築家の理屈と一般社会の認識のズレを少しでも早く修正すべきだと思います。
- ・ まだ入会して間もないため、登録建築家が少ない理由がわかりませんが、その理由の対策が必要ではないでしょうか。
- ・ 「JIA アーキテクト」とすることに賛成です。JIA 正会員と言っても一般の人には理解してもらえないし、「登録建築家」という言い方だけでは、どの登録かわかりにくいので、「JIA アーキテクト」と呼ぶ方が明確になると思います。
- ・ 方向は賛成だが進め方に矛盾があると思います。現状制度からの内容改定でも問題なしだと思います。それから全会員に登録建築家になってもらう。
- ・ 個人的には「JIA アーキテクト」の呼称や資質表明は大いに目ざしたいところです。
- ・ もう少し早く会員間の議論ができるようにしてほしい。
- ・ これをきっかけにJIAの本質的な議論を深めていきたい。
- ・ 問題点を早急にまとめた上で、一部試行でも確実に一步を踏み出すべきだと思います。
- ・ JIAが「職能」、TKが「資格」だとすれば、TKの資格の特典はどうオーライズされるのでしょうか。実利なくCPDが大変との理由で離れた仲間もいます。「建築家」（の職能）からも、JIA（「建築家協会」）はそもそもCPDは当然と思っています。
- ・ JIAの正会員は本来（アプリアオリに）、「建築家」たる最上級の資質・ステイタスであるべきと考えています。

- ・「JIA正会員ルート」の提案の進行について——少し時間が短すぎる。
- ・問題点の洗い出し、その方針を早くだすようにしてほしい。
- ・JIA会費の値上げになるのではないか。

(この点については会員集会当日にご説明いただいたJIA本部職能・資格制度委員会、本部建築家資格制度委員会の両委員長を務める、大澤秀雄氏から下記のように回答いただいた。「登録建築家の新規登録、更新登録費を転嫁するので現在登録建築家になっている人は値下げになり、そうでない人は値上げになる。また登録業務費用を機械化するなどで効率化を図り、値上げ幅を極力縮小していきたい」)

●会員集会討論会

大澤秀雄氏の説明の後には、会場との討論が行われました。以下、録音して内容を要約したものを掲載いたします。(発言者はアルファベットで表記、答えはすべて大澤氏)

発言者A:正会員全員が登録建築家になるのに第三者認定を行うのか。

答え:正会員で一級建築士の方は(問題がないので)自動的に認定する。

発言者A:今、登録建築家でない人は認定評議会で審査をするのか。

答え:とりあえず、1年間ぐらいの猶予期間をもうけて4半期程度ごとの認定評議会を開き、認定の手続きを行う予定。

発言者B:事務作業料、評議員報酬料の財政負担はどうなりますか。

答え:会費として集めます。

発言者C:APEC(エイペック)アーキテクトの説明をお願いします。

答え:国際間(2国間)相互認証です。

発言者D:JIA大会参加の(正会員ルート成立後)CPD単位取得はできますか。

答え:JIA大会に参加のみではだめで、講演、セミナー参加は単位もらえます。

発言者E:登録建築家の実績認定をやめて実務訓練に移行するのはいつの時点ですか。新入会員はどのような判断で認めていくのか。実績認定でいくのか。

答え:登録建築家になることがJIA正会員の必須条件であるが、実務訓練認定で登録建築家になる人が非常に少ないので実績認定ルートを残さざるをえない。UIAアコードにはないが「地域性を認める」の項目解釈でいいのではないか。

建築技術教育普及センター主催の12/2海外諸国における「アーキテクト及びエンジニアの資格制度」の講習会では海外諸国CPD取得の規定がゆるい(ことを勘案すればいいのではないか)。

発言者F:これまでJIAは建築家資格制度に関して二つの不十分な対応(過ち)を犯している。

その第1は、正会員のCPDを実質的に義務化を外した運営を容認していること。第2にJIAが創設したUIAアコードに適合した資格制度としてスタートした登録建築家資格制度が、部分的であれUIAの基準を満足していないことである。

それぞれに部分的であっても不十分な制度を二つ合わせて十分なも

のとさせる今回の手法は、さらに誤った方向に推移し混乱が危惧されます。そういった意味から今提案されている「JIAアーキテクト」は、名称のことではなく、その手順には賛同しかねます。

従いまして、まずJIAの資格制度「登録建築家」をUIAアコードに適合したものに改定する。其の上で、JIAの定款上の正会員の「建築家」とあるを「登録建築家」と読み替える。

あくまでも登録建築家は資格制度であり、JIAは登録建築家が組織する公益社団法人という認識です。当然のことながら、資格制度には更新が必要であり、公益社団法人は任意の登録建築家が組織する団体であり、更新制度はなじまないのではないのでしょうか。

以上、上記の順序であれば、あるいは同時実施することも考えられます。当然、名称は「(JIA)登録建築家」でしょう。

発言者G:セミオープン化して4年になり、資格制度確立の3段階の第2段階(社会制度として確立)に移行しており、オープン化はそうした認識でスタートしているはず。「正会員ルート」も第2段階のステップの中の方策の一つの提案だと思われるが、第2段階の戦略の全体像が見えない。

社会制度としての確立に今何をするのが良いのか、建築士会との話し合いだけでなく、もう少し大きいグラウンドがあるはずであり、その中で何をしていくのかがよく見えていない中で、唐突に会員全員登録建築家の話が出てきているので、その辺の説明をよくしていただかないと理解がたい。

答え:登録建築家の制度は、JIAの活動として建築家の資格をつくることを目指すこと。もう一つは会員のクオリティーを上げて公益性を担保しなければならぬという目的がある。

そもそも皆でならうよと言って立ち上げた制度なのに、6割の人がなっていない事態がおかしいのではないか。皆さん、なりましょうよ。

登録建築家がフルオープン化した段階では、「専兼」問わず登録建築家になれること、建築の設計をする人の資格として登録建築家がある、その中の一部にJIAの集団がいる形をイメージしている(個人の意見として)。

JIAが運営している登録建築家自体を他会に頼らずに社会的に定着させたい。すなわち社会制度経由ルートと同じことになる(個人の意見として)。

発言者G:国家制度にしていけるかもしれないので、その前にコアを作っておくための「正会員ルート」であるということだが、それでは運動としての主体性が見えない。社会的制度になるためにJIAがどんどんリード、提案していく主体的なスタンスが求められるのではないか。

答え:職能・資格制度委員会と建築家資格制度委員会が連携して取り組んでいくことが求められる。

発言者G:認定評議会の下にある建築家資格制度委員会は制度の運営をミッションとするが、資格制度のあり方を検討する職能・資格制度委員会という頭脳部が発足したことは、全体像を計り戦略を練るのに大変よいことで、新委員会にはそのことに注力することを願いたい。

発言者H:登録建築家制度のつまずきは緩和規定を作ったところにある。今後、登録建築家にならない正会員、更新を行わない正会員を除外するのであれば会員はかなり減るが、どのように考えているのか。

答え：国内の建築生産が減り、JIA 会員も減少傾向にある中で、公益社団法人として襟を正していくには、登録建築家になれないなどの会員脱落はやむを得ない。CPDも取りやすくすることや、準会員、ジュニア会員、学生会員などの裾野を広げ、会員増強の手段を会全体で取り組んでいく。

発言者H：JIA 会費が上がると考えられるなか、登録建築家になれないなどの人の脱落により、会員減少となるが緩和規定は作らないでほしい。

発言者I：CPDカリキュラムのレベルを上げて、もっと聞きたい内容にしてほしい。

社会貢献・災害対策活動をCPDに反映してほしい、その分野を反映した制度をつかってほしい。

発言者J：JIA 正会員と登録建築家であることでUIAアコードを満たすという手法は理解しがたい。

JIA 会員（要件）は職能で、登録建築家は資格制度であることは理解しやすい。先のスケジュールを示してほしい。支部・地域会で私たちがどんな建築家になっていきたいのかロードマップをもんでいくことに意義がある。

答え：これからの登録建築家をどうしていくのか、今回やろうとしていることが終局ではなく、今後も改めて考えていく。

まずは登録建築家になっていく上で、会員資格および登録建築家の行方を改めて議論して、JIA の会員であることが建築家としての資格を満たし、UIAアコードを満たしていることがベストなのでしょう。

今回やろうとしていることは中間段階で、JIA の正会員が公益社団法人の一員として一定の基準を満たしていることが求められており、クオリティーを上げておいて一般社会からどのように見られているかを改めて考察していきたい。

発言者E：支部・地域会で議論を進めていく第一歩である。

JIA の正会員がUIAアコードにのっとった建築家であるというのが一番分かりやすく、それを社会制度として国家資格を目指した制度設計として登録建築家があると考えれば一番分かりやすい。

登録建築家制度の改革を先に考えていくと良いという意見が出たが、今のスケジュールでやれるか、またはとりあえず後でやるのか可能性を聞きたい。

答え：まずは全員登録建築家になり、その上で皆でどうあるべきか考えていく方向です。

登録建築家の改革は何年もかかりそうなので、それよりもその間の正会員のクオリティーアップを放置しておくのはよくない。急を要する。この点は委員会でもんでゆく。

発言者K：登録建築家の整備の方向性が見えると良い。

答え：（今日のテーマの）ディテールを年度内で委員会でもんでいる最中であるが、改めて情報開示していくので、その段階でご意見をいただきたい。

発言者G：更新料を会費として集めるが、使途としてその分は確実に資格制度に使われるのか。

答え：その点の区分は第三者性を確保するために、会計上はまったく分けて行く。

発言者L：正会員と登録建築家との○×△比較を見て、こんな説明から始まるものかと大変抵抗を感じた。しかし、正会員でもCPD研修を行わ

い、本来なら、登録建築家に優るとも劣らない正会員が、これほどバラバラな状態の職能団体であることを考えると、外部に説明ができない、公益社団法人である。それに対して芦原会長が改革を断行されるということは、すごいことを決意されたわけで、まずは正会員が登録建築家になることから始めていくとKick Offされた。単に正会員が登録建築家になるのが目標でなく、職能団体として改革していく問題を山積みしていることを考えると、○×△の比較説明ではなく、職能団体としてどうなっていくのか真剣に考えていく切り口になると思う。そういう意味での想いを語っていただいた方が、ロードマップが見えてくる。今、ロードマップが分からない。ただ、こんな職能団体ではダメであることははっきりしている。難しくない言葉で分かりやすく説明が欲しい。

発言者J：支部会報誌「ARCHITECT」でこのテーマ記事を初回3ページ、（その後）1ページずつ掲載していく。その中で自主的に意見投稿できるようにしたい。

発言者M：UIAアコードに適合しない部分があり、その○×△の表をみてビックリしたが、そのことはJIA の責任として明確に改正しなければならない。

JIA がUIA の支部であるからには、会員自身がUIAアコードに適合した建築家であるべき。

登録建築家は国家資格制度のモデルであり、JIA 会員要件とは別のものであるので一緒にした論議でなく明確に分けるべき。

登録建築家制度の改善をしていくと共に、JIA 定款もUIAアコードに合致したものにすべき。

登録建築家資格とJIA 会員であることの二つを合わせてUIAアコードに適合する建築家になれるという言い回しはあまり強調しないほうが良いのではないかと、内向きな話としてわれわれが自覚すべきで、「JIA アーキテクト」という華々しい名前をつけるのは間違いではないか。

こうした問題があることをわれわれは認識したので、それを踏まえて前に進んでいくべき。

JIA 会員でない登録建築家が入ってきたときも踏まえて、その方の問題も解決しなければならない。

外部に依頼している評議員の方にもJIA に制度不備があることが申し訳ないので、きちんとしたロードマップを示した上でやっていかねばならない。

答え：定款第5条に「本会は会員の遵守すべき基準として建築家憲章、倫理規定、行動規範をうける」、第2条に「前項の基準は総会決議により変更、廃止できる」とあるので、定款改正ではなく、総会決議で遵守すべき基準は変えられる。

あとがき

前向きな多数の賛成意見があり、全体に「正会員ルート」を進めようと言う意見が多い印象です。そのプロセスのあり方、会費増額、会員減少に結びつくなどの諸問題はありますが、とにかく本論を確定していくことが先決で、次のステップで詳細確定していけば良いのではないのでしょうか。そして、テーマをもっと広く会員全体に問いかけていく必要があります。

鈴木祥司／東海支部建築家資格制度委員長

静岡ガス本社ビル<冬モード>の見学と料理教室

2014年12月16日(火)建築ウォッチングと料理教室が開催されました。15時から静岡ガス本社ビル(2013年3月竣工)の見学。2013年の夏にも見学させていただいており、今回が2度目です。地上6階建てSRC造一部鉄骨の制振構造、延床面積7,516.97㎡で、静岡県で2件目のCASBEE静岡Sランクを取得しています。「再生可能エネルギーとコージェネレーションの熱高度利用によるエネルギーの未来のかたち」を目指してつくられました。今回はその初年度の実績検証と2年目の取り組みについて、現場でデータをもとに解説していただきました。

初年度の一次エネルギー消費量実績は2013年4月~2014年3月で、1,095MJ/㎡年。一般オフィスに比べ37%削減を達成したそうです。2年目の今年は850MJ/㎡年を目指してより効率の良い機器の設定・調整を行っているところで、中間報告では1年目と比較して3割増し以上の省エネ実績が得られているそうです。

初年度の結果で注目されるのが、性能実績の良いクールヒートトレンチです。1階床下ピットを利用した全長100m、深さ2.0mのチューブ型トンネル。外気取入口から通過風速0.2m~1.5m/sで床下ピットチューブ内を経由してビル内に取り込

んでいます。夏季の温度冷却効果の実績値では、トレンチ出入口温度差を最大9.7℃冷却でき、平均で2.5℃~4.0℃の冷却効果が上がっています。8月の実績では、出口温度は常時27℃以下となり、外気顕熱負荷の100%削減を達成しています。冬季はトレンチ出入口温度差は最大で13.4℃加熱でき、平均で3.6℃~5.1℃の加熱効果が得られたそうです。この結果からも、地中熱利用は注目すべきことだと実感しました。今後も多くのプロジェクトで採用されることが期待されます。

次に、「エネファームを活用したスマートタウンプロジェクト」(駿東郡長泉町のマンション190戸の共同住宅建設)についての紹介です。燃料電池コージェネレーションで発電した電気をT-グリッドシステム(分譲マンション国内初)によって全住戸電気融通するプロジェクトです。発電した電気の余剰分を融通しあうシステムは省エネ効果の高い取り組みです。新しい取り組みなので、運用にはいろいろ課題もありそうですが、この先進的なプロジェクトの完成後にはぜひ見学させていただきたいと思います。

ワインの夕べ(お料理教室)は、静岡ガス本社ビル1階エネリアショールームのCOOKING STUDIOで行いました。



完成した料理

今回のメニューは、「ヨーグルトのニョッキ」「きのことエビのアヒージョ」「冬野菜のマリネ~ソットアチュート~」の3品です。講師は前回もお願いして好評だった「酒菜さかもと」の坂本なおみ先生にお願いしました。クッキングスタジオスタッフの皆さまにも手伝っていただき、とても分かりやすく教えていただきました。全員エプロンを着用して料理開始です。真剣な目つきで、切ったり、こねたり、焼いたり頑張りました。皆さん手際が良く、使い終わったボウルやお皿をすぐに洗い、きれいに盛り付けて、40分ほどで料理が完成(実は下ごしらえを先生とスタッフの方が事前にしてくださっていたのであります)。

さあ、お待ちかねの「ワインの夕べ」、みんなで楽しい試食です。今宵はモノコ三ツ星レストラン「ルイ・キャンディーーズ」のハウスワインCABERNET SAUVIGNON。予算もないので格安ワインのチョイスでしたが、赤も白も品質が高く美味しいワインでした。静岡ガスの皆さま、坂本先生、ありがとうございました。とても楽しいひとときを過ごすことができました。



鈴木俊史 | 俊建築設計事務所



静岡ガス本社ビルにて説明を聞く



料理教室の様子

「小人の空間とヒトの空間、巨人の空間」 ～木の空間とスケールのデザイン遊び

まず、JIA 静岡が12月に開催した「建築フェア」について簡単に触れておきたいと思います。「地域をみつめなおす」をテーマに、今回は静岡を中心に開催されました(8月には浜松で「デザインフェア」が開催されています)。この「建築フェア」では、建築家講演会(2月号「静岡発」)、建築&企業ウォッチング(2月号「静岡発」)、ワークショップ(12月18日)、建築家作品展示(12月22日～25日)の4つのイベントが行われました。

ここでは、ワークショップについて報告します。夏のデザインフェアのときも同様のワークショップが行われましたが、今回はそのバージョンアップ版となりました。進行役は、夏に引き続き静岡文化芸術大学デザイン学部の亀井暁子先生です。参加者は18名で、うち10名が建築やデザインを勉強している学生ということでした。平日にもかかわらずJIA会員以外の参加者が10名もいたというのは、JIA会員としてはうれしく思いました。

ワークショップに入る前に亀井先生のミニレクチャーがありました。木に関して、林業、製材業といった話から、木を使った建築の最新事例まで、大学などではあまり木造については勉強しないと思うので、参加された学生たちにとっても興味深い内容だったと思われます。

さて、ワークショップの内容ですが、木

(天竜杉) でできたブロックを組み合わせ、建築の空間をつくってみようというものです。面白いと感じたのが、大きさの違う人型をブロックで作った空間に置くということです。イベントタイトルが「小人の空間とヒトの空間、巨人の空間」、副題に「木の空間とスケールのデザイン遊び」とあるように、単にブロックを組み合わせる模型のようなものをつくるだけでなく、その模型の実空間での大きさを想像しながらつくるところに重点があるように思いました。模型の中にヒト型を置いてみることで、あたかも自分がその空間に身を置いたかのような感覚になるというのは不思議なものです。ヒト型の大きさを変えることで、スケールを考える、感じるというところが面白いと思いました。

さて、私もワークショップに参加したのですが、これがなかなか難しかったです。使える材料は、同じ大きさの木のブロックとボンドのみ。3種類のヒト型から、「このスケールだと、ブロックひとつの大きさは〇〇メートルくらいかな」というようなことを考え出すと、ブロックは1種類の大きさしかないので手が止まってしまいます。かといって、適当にかたちをつくってから、そこに人型を置いてみると、なんだかしっくりこないという感じです。そんなこんなで、ワークショップの時間は瞬く間に過ぎてしまったのですが、参加した学生の



みんなで記念撮影

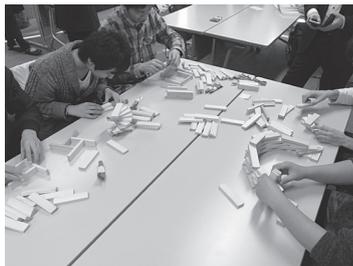
作品の中にはなかなか面白そうなものもあり、「自分は頭が固くなっているのかなー」なんてことを感じずにはいられませんでした。おそらく、ほかのJIA会員の参加者も同じように感じたのではないのでしょうか。自分も参加してみて分かったのですが、たぶん、中学生や高校生でも楽しめる内容だと思います。

終了後に最優秀賞、優秀賞、アイデア賞、静岡地域会長賞が選ばれ、参加者全員での記念撮影となりました。

繰り返しになりますが、このワークショップにJIA会員以外からの参加が10名ありました。ちなみに、建築フェアのもう一つのイベント「建築家作品展示」には91名の来場があったと聞いています。このようなイベントを通じてJIA静岡の活動が広く認知されていくことにつながればと思いました。



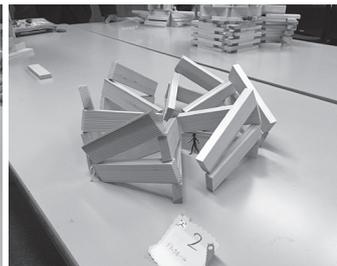
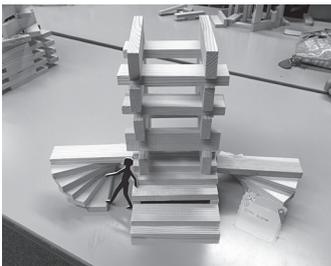
石橋 剛 | 石橋修建築設計室



熱心に取り組む参加者たち



参加者の作品



紙コップとダンボールカードを使った造形ワークショップ

平成26年12月3日、尾張旭市立白鳳小学校にてJIA愛知地域会・事業委員会の企画による「建築教室」造形ワークショップが開催されました。造形ワークショップは、児童が造形制作に取り組むとともに、造形を空間体感することで、建築・まちづくりについて興味・関心を持っていただくことを目的としています。

平成18年から始まった建築教室は9回目を迎え、白鳳小学校での毎年恒例の行事として根づきつつあります。今回の造形ワークショップは5年生の児童を対象とし、3クラス118名の児童が24グループに分かれて制作に取り組みました。

●紙コップを使った造形

各グループは、あらかじめ皆で考えてきたイメージ図（設計図）を基に造形をつくります。始めにイメージ図に従って、体育館の床面にロープで縄張りをします。縄張りの形は、円形、直線、ジグザク、花形、波形など、グループの多様な個性があります。水平に広がっていく造形、天井に向かって積み上がっていく造形、一瞬のうちに30,000個の紙コップによる造形が出現しました。

JIAのメンバーは、児童への組み立て指導・サポートが主な役割ですが、「オジサンも一緒につくろうよ！」と児童からの誘いもあり、楽しい会話をしながら、紙コップの造形をつくり上げていきました。制作中、紙

コップが崩れてしまうグループもありましたが、イメージの完成に向けて皆がチャレンジしていきます。

●ダンボールカードを使った造形

今回の造形ワークショップは、高橋敏郎先生の考案によるダンボールカード4,000枚を使った造形も併せて行いました。ダンボールカードは、カードの切り込みを連結させることにより丈夫な立体造形ができるため、人の背丈以上の大きな造形も出現しました。崩れやすい紙コップの積み上げとは異なり、高さのある造形ができることから、紙コップ造形グループの児童たちの関心を引きつけていました。なかには、紙コップとダンボールカードを組み合わせた予想外の造形も出現し、お城のような空間もできました。

●子どもたちが

造形コミュニティをつくる

鈴木賢一先生の講評では、「何もなかった体育館にニューヨークの摩天楼、北京の宮殿、フランスの城郭、イタリアの街並み、砂漠のピラミッドらしき風景が次々と現れ、皆さんの街が出来上がりましたね」と児童たちにメッセージが送られました。児童たちのパワフルなエネルギーと創造力で一瞬のうちに造形コミュニティがつくられたのです。

講評会が終わると一斉に造形の片付け

ダンボールカードの作品
(摩天楼！)



が始まります。造形を壊すという体験も児童にとっては楽しい瞬間で、歓喜の音が体育館に大きく響き渡りました。紙コップとダンボールカードは、造形ワークショップで再利用するため、皆でしっかり片付けてワークショップの終了です。制作60分、空間体験10分、片付け10分の間、皆で話し合い、協働で造形をつくり上げていくプロセスは、児童たちの貴重な体験になったと思います。

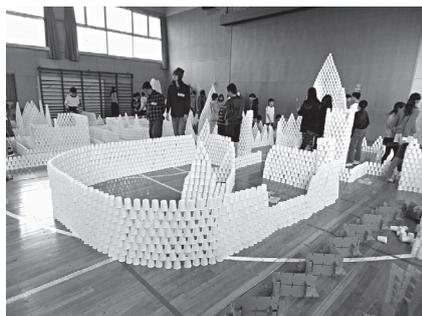
●今後の展開に向けて

ワークショップ終了後、ある児童の「オジサンありがとう！家に帰ってからまた紙コップでつくりたいな！」との言葉が強く心に残っています。たくさんの笑顔と造形の空間体験、この一期一会の建築教室が、これからも児童の無限の創造力を引き出し、建築や街への関心を高めてもらえる機会になればと考えます。

JIA愛知地域会・事業委員会では、「建築教室」造形ワークショップの課題点を確認し、今後の取り組み方法などについて検討しています。企画に改良を加えながら、今後も「建築教室」造形ワークショップを展開していく予定です。



間瀬高歩 | 地域計画建築研究所



紙コップによる作品（見事なお城！）



みんなで空間体験



みんなで協力して片付け

名古屋から発信する「建築と子供たち」

JIAゴールデンキューブ（以下GC）賞2013/2014 実行委員会は、『JIAゴールデンキューブGC賞2013/2014作品集』を発行するとともに、「第1回こどもの建築活動発表交流会」を企画・実施しました。名古屋都市センターを会場として、①企画展、②子ども向けワークショップ、③発表交流会の3つのプログラムを開催しました。「建築と子供たち」に関連する活動と意義の普及、さらには関係者の交流を目的とする一連の事業が名古屋において実施されるのは、これまでなかったことです。

「建築と子供たちを」俯瞰する作品集

『JIAゴールデンキューブ賞2013/2014作品集』（2014年11月発行）は、応募された37作品すべてを掲載した作品集です。審査の経過、結果とともに芦原太郎審査委員長以下4名の審査委員の講評が記録されています。それだけでなく、2014 UIAダーバン大会（南アフリカ共和国）での「Architecture and Children」授賞式のレポート（18カ国46作品の中から組織部門最優秀賞を見事獲得した「子どもたちが応援する歴史的建造物の震災復興」を率いた渋谷さんによるもの）、そしてその活動母体である「建築と子供たちネットワーク仙台」の長年にわたる実践につい

てのインタビューが掲載されました。この資料を一読いただければ、現在日本の中で、誰が建築と子どもに関する活動をしているかの状況を概ね知ることができます。ワンコイン500円で手に入れることができますので、ぜひ手にとって下さい。この作品集の編集制作は実行委員の根岸さん、寺井さんの念入りな仕事によるもので、資料価値の高い記録集となりました。

段ボールキューブで構成した展示デザイン

企画展開催中（11月27日（木）から12月14日（日）まで）には、GC賞の優秀賞と特別賞を中心とする活動紹介のパネル展示を行いました。また、名古屋だがねランド（GC賞2011特別賞）で子どもたちが制作した大規模な木造遊具（ツインペンタ）を再建し、再び遊べるようにしました。GC賞にふさわしい会場構成のデザインは堀部さんによるものです。段ボールで1辺1800mmのキューブをつくり、複数のキューブを会場内に分散することでパネルを系統的に展示することができました。

ゲームに積み木、風船ワークショップ

期間中3つの建築ワークショップを開



『JIAゴールデンキューブGC賞2013/2014作品集』表紙

催し、参加した子どもたちが大いに楽しみました。北九州の安枝さんによる「ぼけっとねいちゃー」（11月29日 13:00～15:00）は、自然を学ぶためのパソコンゲームです。地域の自然環境に親しみ、故郷に愛着を育むための工夫です。木楽舎つみき研究所の萩野さんによる積み木ワークショップ（30日 10:30～15:30）では、子どもたちが膨大な量の積み木と格闘しました。「積み木おじさん」と呼ばれる萩野さんは、強烈な個性と魔法のような話術で子どもたちだけでなく、遠巻きに見ていた大人たちの心もわしづかみにしました。12月7日（日）には、風船ワークショップを開催しました。20人あまりの子どもたちが、長風船をつなぎ合わせカラフルで大きな家を作成しました。

情報交換で盛り上がった発表交流会1日目

名古屋都市センターにて、「こどもの建築活動発表交流会」を開催。各地で実践されている建築活動の報告がされました。11月29日（土）の第1日目には、①伊能忠敬のようなこと（諫見先生：九産大）、②神戸いたい・つくりたい・くらしたい（波



木楽舎つみき研究所の萩野さんによる積み木ワークショップ



参加者同士による情報交換のグルーブトーク



UIA ダーバン大会「建築と子供たちネットワーク仙台」最優秀賞トロフィー

多野さん：京大)、③建築と子どもたちと私(萬野氏：JIA 京都地域会)、④758でまねワークショップ(市井君：名工大)、⑤自然環境ゲーム「ほけっとねいチャー」(安枝さん：ひびきのリレーション)、⑥エコガイドを育てる環境学習型エコスクール(久保さんほか：東畑建築事務所)の6組です。

環境を題材とするさまざまな主体による、多様な手法を知ることができました。建築という領域がいかに幅広いかを示すものです。特に京都地域会の皆さんの活発な活動展開の様子を知ることができ、同じJIA仲間として心強いものがありました。

そして、発表終了後の懇親会。誰もが何か話をしたくて待ちきれませんでした。はじめての交流の機会に参加できたことの喜びで大いに盛り上がりました。宴もたけなわ、そこにUIAの勝者である「建築と子どもたちネットワーク仙台」の細田さん、渋谷さんが飛び込んできて大祝賀会となりました。驚いたのは、各グループによる資料の販売合戦です。自分たちの活動を「知らせたい」、みんなの活動を「学びたい」は、興味関心の度合いをはっきり示す物差しでもあります。活動活性化に必要なのは、同じ空間、同じ時間を共有することであると思いついた次第です。

活動の幅広さを実感した 発表交流会2日目

1日目の6題に引き続き、11月30日



全国各地から集まった参加者の記念写真

(日)に7題の建築活動発表が行われました。

⑦子どものための建築まちづくり学習(近藤さん：名古屋都市センター)、⑧全国高専デザコン2013創造デザイン部門における子どもワークショップ課題の試み(高増先生：米子高専)、⑨折り紙建築を使った立体造形教室の実践(有座さん：建築と子供たちネットワークにいがた)、⑩ほくらは街の探検隊(村松先生：東大)、そして最後に⑪子どもたちが応援する歴史的建造物の震災復興(渋谷さん+細田さん)の発表です。

基礎造形的な活動から、建築、まちづくりへ活動への本格的広がり。遊びから、調べ学習、創作から提案と、学びのステップもさまざま。建築学習の対象の広さをあらためて実感しました。

演題発表の終了した研修室では、情報交換のグループトークが行われました。活動の継続性、学校教育との関連、学習効果の評価、人間関係などに関して熱心な議論がされました。そして稲葉先生からの応援メッセージを最後に、すべてのプログラムを終了しました。

広がる波紋

この期間中、個性的で魅力的な人たちに何人も出会いました。建築家は設計のみならず、子どもの建築教育にもその責務の一端を担っています。まちは長い時間がかかってできるものだからです。だからこそ、プロセスそのものを楽しむ重要性を強く感じました。最短距離で成果を得ようとすると、成果は逃げます。道行きが楽しければ集中、持続、探求、学習、創造の力が内発的に沸き上がってきます。

限られたスタッフ、限られた財源でここまでの成果を得ることができたのは、実行委員の皆さんの献身的な取り組みと、支援をいただいた皆さんのおかげです。名古屋で投じた一石から、地域と世界に波紋が広がるのを垣間見た気がします。ありがとうございました。

鈴木賢一 |
名古屋市立大学
JIA ゴールデンキューブ賞
2013/2014 実行委員会委員長



2015年新年会・CPD研修会と商品展示会を開催

JIA 愛知地域会主催の2015年新年会が、1月16日（金）中日ビル5階中日パレスにおいて開催されました。新年会開催と同時に、CPD研修会と商品展示会を開催させていただきました。

JIA 愛知地域会のご厚意により、新年会の前にCPD研修会（1社あたり20分 合計3社講演）を開催し、新年会の時間帯と同時に商品展示会（1社あたり90cm×150cm 合計18社出展）を開催させていただきました。今回の催しは、昨年8月に暑気払いと同時に開催した商品展示会が好評だったことにより企画され、さらに有益なものとするため、CPD研修会も開催しました。

CPD研修会の開始から新年会終了まで、約3時間となりましたが、真剣に聴講していただき、また熱心に展示をご覧いただき、たくさん歓談させていただきました。ありがとうございます。今後も、このような催しを企画・開催していきたいと思っておりますので、会員・法人協力会員の皆様のさらなるご支援・ご協力をお願いいたします。

<参加者数>

会員28名 法人協力会53名 合計81名

<CPD研修会講演企業>

(株)山王静岡支店、(株)デザインアーク、YKK AP(株) 以上3社

<商品展示会出展企業>

(株)LIXIL、パナソニック(株)エコソリューションズ、三晃金属工業(株)、(株)エフワンエヌ、ホクセイ(株)、中部フローリング(株)、東邦ガス(株)、(株)タジマ、(株)サンゲツ、東リ(株)、三商(株)、(有)柏彌紙店、サーマエンジニアリング(株)、TOTO(株)、ジャパンパイル(株)、(株)山王静岡支店、(株)デザインアーク、YKK AP(株) 以上18社

●CPD研修

①(株)山王静岡支店

「アメリカ産広葉樹の特性と最適な活用・エコ」

講師：大石 賢佑氏

アメリカ産広葉樹は種類が多く、色合いや表情のバラエティに富んでいますが、硬度と耐久性に優れているのも特徴です。建築の内装として用途に沿った最適な樹種を選ぶために、木材の比重をテーマとし、樹種それぞれの特性について紹介していただきました。

②(株)デザインアーク

「イタリア家具見本市『ミラノサローネ』から見るトレンドの変遷・環境」

講師：當山 市代氏

毎年イタリア・ミラノで開催される世界最大規模の家具見本市「ミラノサローネ」は、世界150カ国以上から100万人以上の人々が集まり、その年のデザイン・トレンドがいち早く発信される世界一のデザインの祭典です。特定のメーカーに注目し、最近数年の発表内容を比較することによりトレンドの変遷を紹介していただきました。

③YKK AP(株)

「窓と健康」

講師：繁木 真司氏

建物が寒いとこんなに危ない！寒さが続く建物は病気のリスクも高まります。断熱性能が向上すればカラダは元気になる。「窓」にはこんなすばらしいチカラがあります。健康なカラダをつくる「窓」のチカラ。断熱性能向上がいかに大切かを紹介していただきました。



山本義和 | ジャパンパイル(株)



CPD研修会の様子



商品展示会



新年会

LED 照明の現在地

2014年12月12日（金）に会員研修会「実物を体感から学ぶLEDでの空間演出ノウハウ」がコイズミショールーム名古屋で開かれた。折しも研修会前日に、スウェーデン・ストックホルムにて青色発光ダイオード（LED）の開発で日本人3名（赤崎名城大学教授、天野名古屋大学教授、中村米カリフォルニア大学教授）がノーベル物理学賞を受賞したばかり。「明るくエネルギー消費の少ない白色光源を可能にした高効率な青色LEDの発明」で、「20世紀は白熱灯が照らし、21世紀はLEDが照らす」と授賞理由が説明されたほど画期的な発明は、急激なスピードで実用化されており、これほどノーベル賞が実生活と身近なものに感じたことは私自身も初めて。タイムリーなテーマに参加者も真剣な表情で研修に取り組んでいたことが印象的だった。

●進化するLED照明

研修会はショールーム担当者により「進化するLEDについて」「空間演出のノウハウ」「シミュレーションルームでの体験」の3つの内容で行われた。

まず、市場におけるこれまでのLED照明の進化について。実用化以来、これまで

は基本性能の進化とコスト削減に労力を費やしてきたが、近年はデザイン性など付加価値をつけブランド性を高めながらシステム機能の充実を図っているようだ。その中で時間軸（朝5000K、昼3500K、夜2700K）に応じた光の色の演出で、光を上手に切り替えて暮らしの質を高めることができる調光調色照明や、ワイドに拡散する光と手元だけを集中して明るくする光とを併せ持つツイン配光照明などのシステムの説明は、これからの設計に役立つものだった。

続いて「空間演出のノウハウ」では、「木のぬくもり感を高めるあかり」や「素材感を高める間接光」などの具体的な事例を基に紹介があった。シミュレーションルームでは、ダイニング、天井の高いリビング、寝室など実際の空間で講演内容を体験することができ、改めて空間に対して照明の色、配置が与える影響を感じることができるものだった。

●急速に広がるLED照明の活用

かつて照明としては、性能やコストの面で白熱電球や蛍光灯に遅れをとっていたが、環境への対応から私が手掛ける仕事では、なるべくLED照明を採用するよ

うにしてきた。性能だけではなくコスト面が追いついてきたこともあり、より使いやすくなってきている中、今年から照明カタログは、蛍光灯・白熱球に変わりLED照明のみとなってくるようだ。照明の世界にも世代交代が訪れようとしているのだ。

また、現在LEDは一般照明だけではなく、さまざまな分野に広がっている。携帯電話の画面、信号機、トンネル、車や電車の照明のほか、植物工場での野菜の水耕栽培などでも使われている。LED照明が、植物の光合成に必要な光波長成分を出すことにより、太陽光の代わりになるのだ。美術館や博物館では、赤外線や紫外線があまり出ないLED照明の採用が、展示室の空間を明るくものへと変えている。LED照明は省エネルギーに役立つと共に、生活を快適・安全なものへと変化させているのである。

●LED照明への期待

これまで建築家は、設計した建物にふさわしい照明器具をデザインしてきた。LED素子は小さいため、照明器具の小型化・軽量化が可能になり、デザイン性に優れた導光板を使った照明器具も誕生してきている。今の時代にライトやアアルトがLED照明器具をデザインしたらどんな照明になるのだろうかと思っただけでも興味が尽きないが、これからの新しい建築に間接照明ではなく、LED照明の特性を生かした新しい照明器具がどのように現れてくるのか関心を持って見ていきたい。



コイズミ照明様の龍野氏



セミナーの様子



森本雅史 | 森本建築事務所

「閉じる」を模索する



学生の部 金賞 住田百合耶 (横浜国立大学4年)

●現代に問うテーマ

「特定秘密保護住宅」。初めて触れる言葉だった。シンプルでありながら、どうとらえてよいものが分からず戸惑う一方で、創造の幅は無尽大のような気がしてわくわくした。その少々堅苦しいとも思わせる言葉はよくよく考えてみると、暮らしを開いていこうとする、現代がなんとなくもつ価値観を鋭く問い直すような今考えるべき重大なテーマであるように思えた。

●「秘密」という可能性

暮らしの中にも必ず閉じてほしい部分はある。寝室や浴室はもちろんのこと、人によっては書斎や趣味室もそうであるかもしれない。プライバシーの感度は人それぞれである。しかしこれらはどこか「見えない」かどうかだけで語られているように私は思う。この「閉じる」が単なる「見えない」ではなく、さらに広く五感に働きかけるものとなれば、「閉じる」ということが新しい暮らしの価値を見いだすのではないかと示唆している。

●何で閉じるか「秘密と壁」

建築を構成する部材の中で、その不透明で視界を遮断する「壁」に「秘密」に直結する必然性を感じた。しかし、外壁により外部と内部を、内壁により部屋同士を分離する壁はどこかマイナスのイメージすら湧く。その壁という存在、それ自体が生活の中心となっていく。壁に棲むことが内部と外部の分離を超えてつながりに変わる考え方があるのではないか。壁の中で展開される細く長い暮らしに対する想像は私の興味を引立たせた。

●住み手と建築、他者と地域へ

壁は徐々に地中深くまで根を伸ばし、その深さや幅の細さが音や光などで刺激される視覚や聴覚、さらには温度など皮膚で感じることで、地上とのつながりを奏でていく。その体感が秘密の深度となる。

壁に暮らすことにより、今まで内部だった屋根下に新たな半外部空間ができる。家に屋根のかかった公園のような地域の人が使える空間が誕生する。時にはギャラリーや図書スペースなどそのアレンジは自由である。また壁に棲むことは、この半外部空間に間仕切りとなるものをつくる。つまり他者も一時的に秘密を保護する空間を共有できる。壁の内と外、その両者は相互関係にあると言える。細く、長く、深い生活はいつで

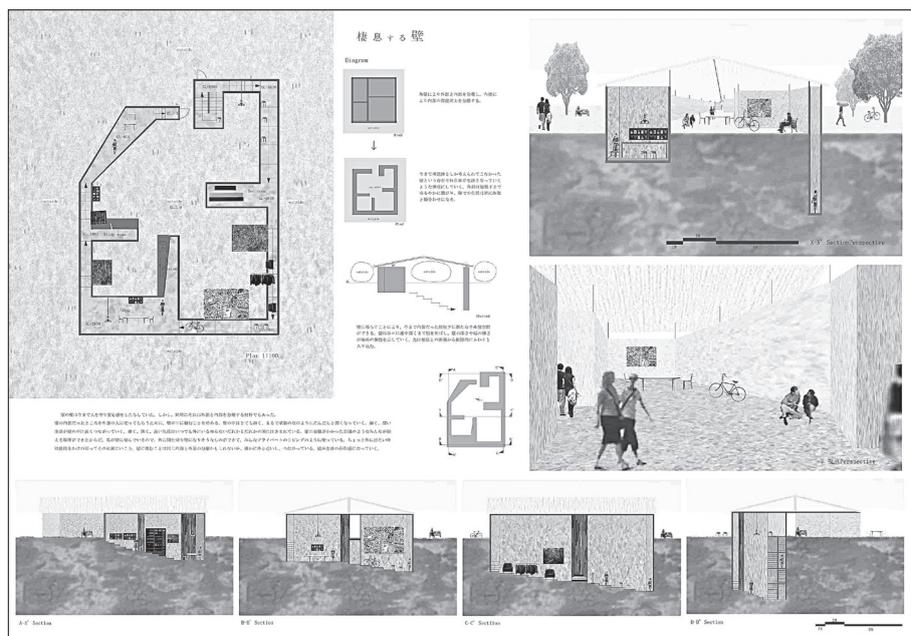
も外にいる知らない誰かと誰かの間にはさまれている。そこには確かに外と近く、いつでもつながっている暮らしがある。

さらにこのような内外が反転した建築が軒を連ねることによって、半外部の単位は徐々に広がりを見せ、不特定多数の人を巻き込んでいくことも考えられ、個と集の接続関係を再定義するものとなり得る。使い手から他者へ、建築単体から地域への派生が可能であると考ええる。

私はこの作品は隣人との接点が閉ざされつつある日本の現代社会に対し、微力ながら問い質すものだと思っている。いつも社会や存在する物に対し、本当にこれでいいのかと疑い、少しでも今までとは違った思考回路で考えることが常に価値を生み出すきっかけになると信じている。

●さいごに

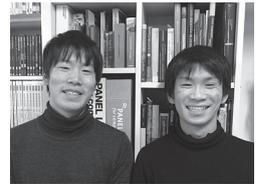
以上が「棲息する壁で私が考えたことです。今回 JIA 東海支部設計競技に参加させていただき、審査員の先生方、同世代の他大学・社会人の方々との新たな出会いができ、とても嬉しく思っています。審査の中でいくつがご質問もいただきましたが、「この作品はこういうふう発展していくのではないかな」など複数人の思考が重なることで生まれる、あの場にしかないようなコメントも頂戴することができ、自分の考えたことが思いもよらぬかたちで進化していくことを感じることができました。作品に共感し、評価してくださいました審査員の方々、その他関係者の皆様はこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



作品名「生息する壁」

「秘密」が生むマチのコミュニティ

一般の部 金賞 市川 雅也 (立命館大学大学院 M1 年) (右)
久保田貴大 (立命館大学大学院 M2 年) (左)



このたび、審査委員長の島田陽先生はじめ、審査員の皆様にさまざまな議論と評価をしていただき、金賞をいただいたことを大変嬉しく思うとともに、このような議論の場の設営だけでなく、コンペを開催していただいたJIA 東海支部関係者の皆様、本当にありがとうございました。

JIA 東海支部設計競技は、私たち2人とも愛知県の出身であることに加え、歴史ある設計競技でありながら、毎年抽象的な課題の中で自由な提案からさまざまな可能性を引き出す面白みがあるコンペとして注目していました。

●広域の視点で課題を解釈

そうしたなか、今年の課題は「特定秘密保護住宅」という例年にも増して抽象的でとらえにくい課題であり、「現在の住宅はすでに内に閉じ、多くの秘密を隠(保護)しているのではないか?」といった課題に対する疑問も同時に浮かび、住宅という既存の枠組みにとらわれない広域の視点をもった解釈の必要性を感じました。

大学院ではランドスケープと建築の領域横断的なデザインについて思考をしていることもあり、秘密を保護する住宅の存在によっていかにマチや周辺環境を変えられることができるのか? 特定秘密保護住宅といった考え方によって、今までにはない景色やコミュニティをつくることができるのではないかと、いったマチを変えるきっかけとして課題をとらえ直すことで、未来を描こうと楽しみながら初めてこの設計競技に参加をさせていただきました。

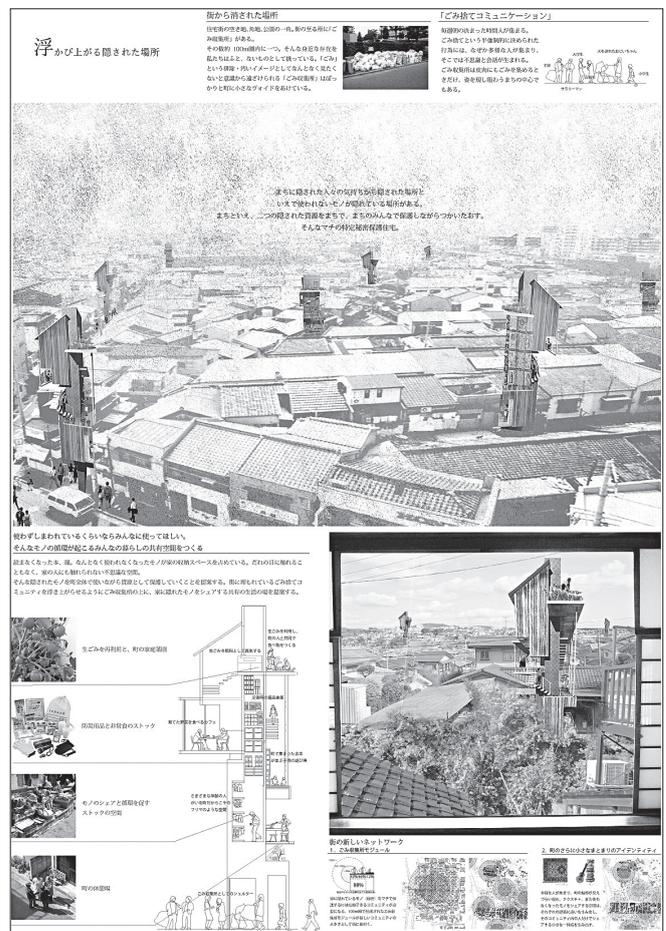
最終的な提案では一つひとつの住宅で秘密を保護するのではなく、マチ全体で秘密を保護する場を計画し、秘密を共有することによって生まれる一体感であったり、共生の意識によってコミュニティを顕在化することができると考え、各住宅の離れのような存在をマチにつくる提案をしました。秘密を「各住宅に眠っている使われないモノ」としてとらえ、それらを持ち寄る場をつくることで、マチでモノの循環を引き起こしたり、集めるものによってマチごとに特徴が生まれたりしていきます。自然発生的に生まれたアイデンティティはさらにそのマチごとの共生意識を持たせながら、誇りとなり、秘密を介して、まちのよりどころへと変化をしていくと考えました。

●プレゼンの重要性を実感

今年度は一次審査に加え、プレゼンテーションの場と質疑の場があったことで、課題に対して自分たちがいかに解釈をし、可能性を見つけ出したか、提案する意義を伝え、じっくり議論するこ

ともできました。また、これまでも増して各提案の面白みや課題に対する審査員のとらえ方を聞くことができ、非常に貴重な経験にもなりました。なかなかプレゼンテーションだけでは伝えきれず、口頭で思いを説明していくなかで評価をしていただいた面もあり、紙面という手段だけでなく、実際の日や口で相手に伝えることの重要性を感じた反面、紙面を見ただけでも世界観が伝わるようなプレゼンテーションのスキルがまだまだ足りていないという課題も見つけることができました。

こうしたコンペでの課題をきっかけとし、常に新しい建築の提案だけでなく都市に波及していくような広がりのある提案までを形にして姿勢を今後も大切にしていきたいと思ひますし、また来年度もぜひこのJIA 東海支部設計競技に参加をし、新しい審査員の下、プレゼンテーションの機会を得ることができるよう取り組んでいきたいと思ひます。



作品名「浮かび上がる隠された場所」

地域住民との「逃げ地図」づくりを通じ 職能生かす

JIA 関東甲信越支部 日建設計 設計部 主管 羽鳥 達也



東日本大震災以降、われわれ日建設計のボランティア部は「逃げ地図」という地図の表記方法を開発し、被災地や南海トラフ大地震が予想されている未災地にて、地域住民とともにその地域の「逃げ地図」を作成するワークショップを開催してきました。

「逃げ地図」はこれまでの津波ハザードマップとは異なり、浸水域から高台までの避難経路と、避難に必要な時間を表現した地図です。浸水域以上の高台の目標地点から逆算し、単位時間ごとに色分けし表現します。避難の際には普段のようにスムーズに移動できないと想定し、後期高齢者の歩行速度を基準にしています。後期高齢者が10%勾配の坂を上る速度で3分間に進めるのは129mと算出できることから(注1)、3分間(129m)ごとに色を分けて塗ります。高台まで0～3分(0～129m)かかる道を安全に感じる緑、4～6分(129～258m)かかる道を黄緑、7～9分(258～387m)かかる道を黄色、10～12分(387～516m)を橙色、12～15分(516～645m)を赤、16～18分(645～774m)を紫、19～21分(774

～903m)を茶、22～24分(903～1032m)を黒、というように、時間がかかるほど危険を感じる色で表現した地図です。避難時間の可視化は、逃げ遅れるリスクの可視化でもあります。これにより逃げやすい場所、逃げにくい場所が一目で分かる地図になります。

地域の避難についての性状が分かるようになると、少しでも逃げやすくしようとする意識が働きます。ワークショップの参加者を見ていると、緑に近い色を増やそうとする意識が自ずと働くようで、避難ポイントを増やせば緑色が増え、近道ができたなら赤が黄色になるとか、黒い地域のために避難タワーが必要なのではないかなど、議論が自然と始まるのです。「現状より人が避難しやすい街にするにはどうしたらいいか」というシンプルな目標に向け、逃げ地図をプラットフォームとして、フラットで建設的な議論が始まります。

地域によってはこうした議論が実際の活動に反映され、高台に上る手すり付きの階段が設置されたり、住民同士が話し合い、避難の際に隣家の壁を乗り越える階段

が設置されたり、倒れやすいブロック塀からアルミの軽い柵につくり替えたりする例が出てきています。

こうした活動が次第に注目され、ホンダのカーナビの機能に応用されたり、各地で開催される防災や地図関連のシンポジウムに登壇を依頼される機会が増えました。そこで他業種の方からよく言われるのが、「われわれの職能からの発想ではつくることができなかった地図だ」という感想です。

思い起こせば、「逃げ地図」は、被災地に何かできないかと考えたときに、われわれ自身が被災地の現状のリスクが具体的には分からず、まずは被災地の現実を知ろうと試みたことから思いついたものだったのです。それが余震で行方不明者の捜索もままならならず、これからどうしろいか話し合いも進まない人たちの不安を低減する情報となることも分かり、現地でワークショップをすることにつながっていったのです。

建築を設計するわれわれは、コンタ模型で地形を正確に表現することや、街の模型でスケール感を把握すること、プロジェクトの予算からグレードを設定することも自然に行っていますが、必要な手立てを考えるために現状を把握する、そのために模型や図面などの情報で可視化するというのは、意外と特殊な能力なのかもしれません。

被災地では今も、生活再建、復興には不安が常に付きまとっています。そんな中で、現状を的確に認識し合うことが、茫漠とした不安を、具体的な心配事に変えていく一つの筋道です。具体的な行動の足掛かりとなる情報を示し、意見を抽出し取りまとめる能力をわれわれの職能は有しています。被災という経験を学びに変え、職能の応用可能性を考えてみることは、今後の建築界にとっても思いの外重要なことなのではないかと思いはじめています。

注1:歩行速度は「高齢者・障害者の道路交通計画」(秋山哲夫ほか)より引用。勾配による速度の低減率においては「心拍数から見た山林労働者の歩行負担(2)」(京都大学和歌山演習林における実験例)を参考とした。



ワークショップの様子。
参加者たちは手に色えんぴつを持つ



神奈川県鎌倉市材木座で作成した逃げ地図

地中埋設管の被害を考える

名古屋大学減災連携研究センター ライフライン地盤防災寄附研究部門

野中 俊宏



生活に必須なライフラインの一部である、上水道、都市ガスは地中埋設管により広範なネットワークを形成している。南海トラフ巨大地震に向けて、地中埋設管の耐震性の向上およびそのネットワークの冗長性の向上が重要な課題となっている。

地中埋設管の被害は、1964年新潟地震が契機となり、1995年兵庫県南部地震などの巨大地震での経験から、被害の起きやすい箇所・管種の分析が進んできた。埋設管は地震時に地盤の動きに追随するが、それゆえ管が持つ変位能力を超えた地盤変状が起こると被害が発生する。よって地震時に大きな地盤変状（液状化、地すべり）を伴う地盤、または近い距離で地盤変状に大きな差が生じる地形（造成地における切盛境界）で被害が多く発生している。また管の種類については、昭和30年代頃に用いられていた石綿セメント管（水道）、ねずみ鋳鉄管（都市ガス）などは、脆性的で折れやすい性質を持っており、継手部の接合方式が古い鋳鉄管（水道、都市ガス）では、抜き防止機構を有しておらず、地震時の地盤変状により継手部に被害を生じることがある。

東北地方太平洋沖地震にて、宮城県上

水道の送水管において、地盤変状に伴う継手部の抜き被害が発生し、被害箇所より北側では広範囲で水道の供給が途絶した（図1）。送水管のような基幹となる管路では、管自体の耐震性を高めることと同時に、ループ化や二重化などの冗長性を向上させる対策も重要となる。

中京圏の状況について、愛知県水道用水では現在、浄水場間の管路を繋ぐ工事を行っており、これによって地震災害時や事故時など非常時に広域的な水運用が可能となる。都市ガスについては、輸送幹線の環状化によりネットワークの冗長性が確保されている、また2013年には、知多市と四日市市を結ぶ海底導管「伊勢湾横断パイプライン」が完成している。

埋設管の耐震対策については、先述したような継手部の抜き被害を防ぐため、水道業界では「NS型ダクタイル鋳鉄管」への入替が進んでいる。これは継手部に大きな伸縮性および可とう性をもつ材料で、施工も容易である（写真1）。また都市ガス業界では、圧力の低い管に対しては、軽量で可とう性を有する「ポリエチレン管」への入替を、圧力の高い管に対しては溶接鋼管を導入している（写真2）。これらは継手部を

溶接することにより管と一体化させ、弱点となる継手部分を無くすることができる。

これらの管種は、東北地方太平洋沖地震においてもほとんど被害が生じず、高い耐震性が実証されている。現状、水道基幹管路の耐震適合率は34.5%¹⁾、都市ガス本支管の耐震化率は80.6%²⁾であり、今後も耐震管への入替を進めていく必要があるが、大延長となるため対策箇所の優先順位付けが重要となる。特に液状化による被害が甚大となる恐れがあるため、液状化発生地区を予測できれば貴重な情報となる。しかし国・自治体から公表される被害予測では濃尾平野西側は液状化危険度が高いエリアがほとんどであり、対策優先箇所の絞り込みは困難に思われる（図2）。工学的基盤面の傾斜、表層地盤の地層構成、過去地震における液状化履歴などのさまざまな面から液状化地区の絞り込みを行い、地中埋設管の対策優先順位付けの一助となる研究を進めていきたい。

地震時に水道、都市ガスの供給が途絶することやその後の復旧が遅れることで、人命、地震後の生活へ与える影響が大きくなる。地中埋設管の耐震化を進め被害を最小限に抑えること、そして被害が発生した場合でも、ネットワークのループ化、複線化により別ルートから供給を可能にするなど、被害の影響を最小限に抑える取り組みが引き続き今後も求められる。

- 1) 厚生労働省、重要給水施設管路の耐震化に係る調査結果（平成25年度）
- 2) 日本ガス業界、都市ガス業界における地震・防災対策の取り組みについて



写真1：NS継手（日本ダクタイル鉄管協会）

写真2：ポリエチレン管（東邦ガスホームページ）

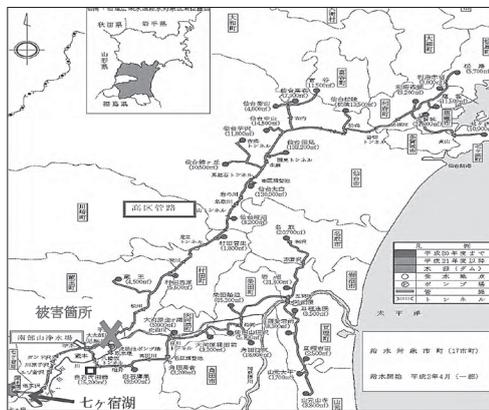


図1：仙南・仙塩広域水道用水供給事業概要図（厚生労働省：「平成23年度東日本大震災水道施設被害等現地調査団報告書」）

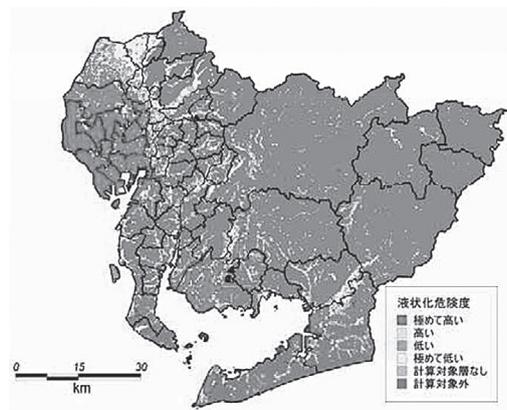


図2：5地震参考モデルの地震の液状化危険度（愛知県：「平成23年度～25年度愛知県東海地震・東南海地震・南海地震等被害予測調査報告書」）



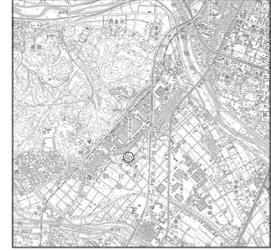
正面全景。車寄は移設、下屋は増築



執務室南外観。胴差に一筋跡がみられ当初の窓内法が判る



一階内部。執務室では補強柱が林立するが、耐震要素とはなっていない



■紹介者コメント

朝日町は中心部を旧東海道が貫き、四日市・桑名両宿の間の宿で焼き蛤を売る茶屋もあったようだ。現状の街区はこの東海道沿いに並ぶ縄生(なお)、小向(おぶけ)、柿、埋繩(うずなわ)などの字からなる旧街区と、北西部の丘陵地における宅地造成により生まれた新街区からなっている。

朝日資料館は大正5(1916)年に朝日村役場として建設された。昭和37(1962)年まで町役場として使用され、その後公民館を経て、現在は資料館として利用されている。この間役場時代はもちろんのこと公民館、資料館への用途変更に伴い、そのつど改変を加えている。

敷地は旧街道から少し南下したところにあり、

建物は西(南西)面して建つ木造二階建てである。建物の祖形は、平面形が桁行七間半、梁間四間の総二階建てで、一階では正面に切妻棧瓦葺の車寄が取り付け、背面側で二間幅の押入を突出させている。

外壁は下見板張ペンキ塗。外部建具は一部アルミサッシュに改修されているが、当初は引違硝子窓で、雨戸を建てていた。屋根は寄棟造棧瓦葺である。

内部は、一階では過半を執務室とし、階段に通じる廊下を挟み村長室と宿直室を配する。執務室の現状は、板敷の床切り下げに伴い、東・南面の硝子窓を八寸ほど下げている。この改修は町役場時代の座式から椅子式への変化に伴う

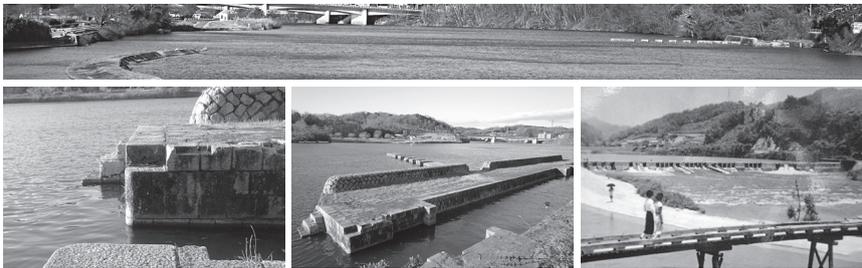
改修ではなかろうか。ちなみに天井は踏上天井で、当初の天井高は約八尺である。

二階は議場、会議室と倉庫で、全域棧椽天井、天井高は約七尺と低く、会議室の現状が畳敷であることからみて座式だったであろうか。

このように朝日町資料館は、小屋組にトラスを用いているものの和風の要素を色濃く残しており、同年建築の旧明村役場(201206 既報)と好一対をなしている。

所在地:三重県三重郡朝日町大字小向872
登録番号:24-0023
年代:大正5(1916)年
アクセス:近鉄「伊勢朝日」下車、徒歩5分

林 廣伸 | 林廣伸建築事務所



上 | 全景 下左から | 丁寧なつくりの石積み 排砂門と船通閘門 当時の面影(現地の説明看板にあった写真)

■発掘者のコメント

愛知県豊田市にある矢作川中流に明治用水堰堤があり、その水頭首工の上流におよそ100年前の旧堰堤が残っている。左岸に幅3m、長さ30mほどの水路のような石張りの船通閘門と川の中央に向かって石張りの排砂門5門跡、右岸川面に幅10m、長さ80mほどの堤防が浮かんでいる。昭和33(1958)年に新頭首工が完成し、この旧堰堤は取り壊されたが堅牢なため壊しきれず現在に残っている。

明治用水は江戸末期、都築弥厚が計画したことになり、伊与田八郎、岡本兵松らによって受け継がれ明治14(1880)年初代堰堤は出来上がった。前述の旧堰堤は2代目堰堤で人造石(長

七たたき)発明者の服部長七によって明治34(1901)年に筏通し、放水門2門、排砂門5門がつくられ、船通閘門は明治39(1906)年完成した。陸上交通が発達するまで、矢作川は物資輸送の大動脈で海産物・薪炭・木材などが船や筏で運ばれ、船通しを通過するのに時間がかかるので旅館・店舗もでき賑わいをみせた。この頭首工は人造石による大規模な堰堤の現存する唯一の例として平成19(2007)年「土木学会選奨土木遺産」に認定された。

服部長七の「長七たたき」と呼ぶ人造石による建造物は愛知県をはじめ全国各地につくられおり、彼は明治用水の各所、愛知県岡崎町夫婦橋、名古屋市庄内用水元杖樋門、名古屋築港、



四日市港の潮吹き防波堤、広島県宇品新開・築港(現広島港)などを手がけた。

「長七たたき」の技法はセメント、コンクリートの発達により採用がなくなったが、非常に堅牢で耐久性があることから、カンボジアの世界遺産であるアンコール遺産の日本チーム修復工事に採用された。エコロジカルなこの工法を見直したいものである。

所在地:愛知県豊田市室町7丁目(矢作川河川内、明治用水新堰堤北)
年代:明治39(1906)年完成
アクセス:愛知環状鉄道・三河豊田駅下車、バス「豊田記念病院行き」平和町下車、徒歩15分

鈴木祥司 | アトリエ祥建築設計



東海支部の本部理事、2015年度は3名に

本部理事・東海支部長 石田 壽



2014年12月17日の第223回理事会当日はとても寒い日となり、新幹線も雪のため遅れが出ていました。その影響で遅刻・欠席が目立ち、開催時点では24名中14名の出席で何とか理事会が成立するという状況でした。議題が多い中、フェロー会員の寄付の件、全国会議、特に災害対策会議と環境会議のゲストとの議論で多くの時間を費やしました。

【審議事項】

1. 入退会承認の件 (筒井専務理事、浅尾事務局次長)

新規入会希望：正会員2名、準会員；ジュニア15名、学生1名、協力会員：法人6名、個人1名、会員種別変更：旧協力会員→専門1名、正会員→シニア2名、退会希望：正会員9名、ジュニア1名、法人協力1名。退会希望のジュニア会員は正会員への手続き中、退会か移行か入会金の減免は？と協議になり保留。ジュニア会員の退会を保留とし、他の入退会を承認

2. フェロー会員推挙承認の件 (道家フェロシップ委員会委員長)

一次推薦の第2弾として2月末に受付け、本年度の最終締め切りとする。また寄付の意義付け、および寄付の用途を明確にする。来年の総会で披露したいので、今回承認ではなく確認のみとする。

3. 選挙管理委員会委員、総務委員会委員、広報委員会委員、認定評議会評議員、建築家資格制度委員会委員承認の件 (筒井専務理事)

委員会規程第8条により、各委員会委員就任について審議。承認

4. (仮) JIA まちづくり会議および災害対策活動に関する全国会議設置の件 (連理事、岡部氏)

①名称：JIA まちづくり会議

議長：連 (関東)、委員：亀井 (関東)、鈴木 (北海道)、手島 (東北)、尾関 (東海)、山田 (中国)、大原 (四国)、久高 (沖縄) 承認

②名称：(案) JIA 災害対策会議

会議名称を審議、名称のみ承認

5. 役員候補者選挙規程改正の件 (上浪総務委員会委員長)

東海支部選出の理事の改選時期を是正するため、2015年度1年間に限り、割り当て定数を3名とする。承認

6. JIA・KIT・NPO 法人建築文化継承機構三者覚書の件 (森副会長)

「JIA・KIT 建築アーカイブス設立に関する協定書」に基づき三者による覚書を交わし、その活動の継承と発展を図る。承認

7. 「小規模建築物・設計施工一括用請負工事約款」改訂版承認の件 (天野民間連合協定工事請負契約約款委員会委員)

改訂建築士法による追加変更を行ったことにより再度審議。承認

8. 「小規模建築設計・監理業務委託契約約款」承認および「JIA 建築設計・監理業務委託契約書」の取り扱いの件について (森業務改善委員会委員長、天野民間連合協定工事請負契約約款委員会委員)

「小規模建築設計・監理業務委託契約約款」承認

「JIA 建築設計・監理業務委託契約書」の取り扱いは今後検討。

【報告事項】

1. 総務委員会報告 (準会員・協力会員の本部経費について、委員会・全国会議体制について) (上浪総務委員会委員長)

準会員・協力会員の本部経費およびJIA 委員会・全国会議体制(案)についてミッション・組織体制の報告。

2. 会員増進進捗状況報告 (道家フェロシップ委員会委員長)

各支部の取り組みの報告。

3. JIA 建築家大会2016開催について (筒井専務理事)

2016年の開催支部は難航する。次回理事懇談会までに検討。

4. 活動および業務執行状況報告 (筒井専務理事)

①第2四半期決算報告：第2四半期決算では全体公益比率は56.1%、事業の収支が入ると予断を許さない。

②公共建築発注方式の多様化への対応 (公共建築設計懇談会・DBシンポ開催等) 報告。

③建築家資格制度改革の進捗状況報告：大澤委員長より支部会員集会での説明状況と今後の予定の報告。

④改正建築士法の普及活動などに関する活動報告。

⑤伝統的木造住宅の省エネルギー基準の適用に関する要望書について。

⑥後援名義承認の報告 (会長専決事項)

5. JIA 環境会議WG委員について (野沢JIA 環境会議議長)

野沢議長よりこれまでの経緯と理事会からの疑義に対する説明あり。全国会議として各支部との連携を考え、支部選出委員とWG委員の役割が不明確な構成は見直す。また会計はJIA内で一本化する必要があり、受託研究事業なども同じであることを確認。委員が以前の環境行動ラボのメンバーで固定していることも今後は是正すること。

6. 低炭素社会推進会議への活動報告 (野沢JIA 環境会議議長)

7. 長野県神城断層地震支援活動報告 (芦原災害対策本部長、上浪現地災害対策本部長、山口現地災害対策本部長代行)

地震の発生から今日までの支援活動の報告があり、JIAの実績、迅速性が自治体に評価され、また支部内各地域会とのネットワークは有効に機能したとのこと。今後は各支部とのネットワークを確立し情報発信をしていきたい。

8. その他 (事務局)

2014年度理事会・理事懇談会開催日程 (1月～6月)、黒川紀章建築都市設計事務所の民事再生法適用申請について。

東海支部役員会報告

岐阜地域会長以来、10年ぶりの支部役員会出席でした。公益社団法人化は構成員である会員の資格や会計基準が厳しく、また会員個人と本部とで構成される組織体系が基本となり、従来の各地域会・支部の位置付けや自由度と公益社団法人との整合性には苦労されたことでしょう。東海支部は、今日までの支部長・幹事諸氏のご努力で、その組織づくりが完成に近い形にできていると感謝しています。今後は組織論(手法)から本来の目的である「建築とは」「建築家とは」を語る談論風発の場になり、それが会員拡大にもつながってゆくことでしょう。

車戸慎夫 | 車戸建築事務所



日時：2014年12月19日(金) 16:00～18:00

場所：昭和ビル5階 JIA 支部会議室

出席者：支部長、本部理事、幹事11名、監査2名、オブザーバー7名

1. 支部長挨拶

12月16日(火) 会員集会の出席ありがとうございました。会員集会での諸内容を各地域会に周知させ、より一層議論を深めていただきたい。

2. 報告事項

(1) 本部報告

①第223回理事会(12/17)(石田) ※P21「理事会レポート」参照

②第17回フェロウシップ委員会(12/11)(谷村)

東海支部の入会者の目標を、愛知6名、静岡3名、三重1名、岐阜1名とする。

③第9回 本部広報委員会(12/9)(奥野)

メールマガジンについては、見やすくするよう検討している。JIAロゴ規定、配布物などの記載基準について…JIA版の簡単なものを作る。(従来のブルー版のリーフレット用として)。JIAリーフレットについては作成中。

④職能・資格制度/建築家資格制度合同委員会(11/27)(植野)

本部理事会資料(12月16日の支部会員集会説明会資料に同じ)が基本的な本部の考え方である。

(2) 支部報告

①第2回 東海支部総務委員会(12/4)(奥野)

【審議事項】

支部総務委員会の職掌

【協議事項】

支部財政は、現状で毎年約50万円不足している。1～2年で財政破綻をきたす。

1. 収入を増やす

○支部会費徴収について

・12,000円～15,000円の範囲で試算作成。

・愛知地域会の会員減少がつかめないため、不明瞭であり会員減を想定した試算をする必要がある。

・資格制度変更による本部会費値上げが議論されている。支部会費の新設は難題となる。

○支部事業の検討

・収入が見込める事業はないか(資格制度特別講習会のようなもの)

・コンペなどに「冠」をつけて収入を増やす。

2. 支出を縮小する

○事業見直し

・支部5委員会事業のうち、主宰は支部、主管は地域会とし、卒コンなどの支部負担を減らす。

・事業隔年化の検討もふまえ経費・担当委員の作業負担を減らす。

・「ARCHITECT」の隔月発刊(メール配信により情報伝達の遅延をフォローする)。原稿料削減→会員記事割合を増やす。

○事務局移転

・事務局を移転して固定費の削減を検討する。

②東海支部会員集会(12/16)(鈴木祥司)

16:00～18:00 愛知芸術文化センター12階アトスペースE・Fにて「JIA正会員は全員登録建築家に」をテーマに行った。出席者42名。アンケートを実施。回答29名(うち賛成20名、ほぼ賛成5名、反対1名)

※詳細はP6～8に掲載

(3) 各地域会からの報告(各地域会長) ※P23「地域会だより」参照

3. 議事

(1) 審議事項

①第31回 JIA 東海支部設計競技(矢田)

現時点で、広告収入345,000円(予算額)を390,000円に、支部事業費568,576円(予算額)を523,576円に変更して承認。

②第32回 JIA 東海支部設計競技 2015年度予算案(矢田)

総事業費930,000円にて承認。ただし、協賛金収支を高める方向で努力をする。

③第22回 JIA 東海学生卒業設計コンクール2015 予算案(吉川)

総事業費を695,000円とする。承認。

④ジュニア会員申込 加藤正司(愛知地域会)(谷村) 承認。

⑤「坂倉準三学習会開催について」(中西)

後援ではなく他団体との共催として追加資料と共に承認。

⑥法人協力会員申込(谷村)

東海支部として法人会員1名を推薦する。(12月19日付)

三重地域会所属(株)TJMデザイン名古屋店 店長 足立憲彦氏。承認。

(2) 協議事項

①2014年度リフレッシュセミナー参加者募集について(久保田)

・支部から70,000円支給と参加者1人当たり10,000円を負担する。交通費は本部負担。(ただし参加者総数5名以内:愛知2名、静岡・三重・岐阜各1名が目安)

・参加者は1人当たり18,000円が追加が必要であるが、それは各地域会が負担する。

②「改正・建築士法の施行にあたり業務報酬基準に準拠した契約の締結の徹底に関する共同要望の実施について」(石田)

(3) その他

①東海支部事務局 カラー印刷の代金について(久保田)

A4:3円/枚、A3:5円/枚 とする。(片面印刷)

②「まちづくり全国会議」委員派遣について(石田)

愛知地域会、尾関利勝氏を派遣。

③東海支部「持出役員会(静岡)」について(尾林)

支部が50,000円負担する。2月27日(金)プラザヴェルテ会議室(沼津駅北口)にて。

④ゴールデンキューブ賞特別委員会 中間報告(鈴木)



磐田市旧見付学校

東海道五十三次28番目「見付宿」の街の中心に建つ日本最古の木造擬洋風小学校校舎です。

明治5(1872)年の学制発布を受けて開校し、名古屋の堂宮棟梁 伊藤平右衛門(後の9代目伊藤平左衛門)によって、この新校舎が建設されました。

漆喰塗りの外壁と隅石、エンタシス様式を模した6本の飾柱のある玄関、シンボリックな棟屋。ヨーロッパの文化を取り込み始めた時代を、迷いも含めて写し取ったかのような、このミクスチャー建築は、愛嬌のある姿で150年近くにわたって旧中心街に立ち、磐田のシンボリックな存在です。磐田市見付の出身者で小学生時代にこの建築を写生したことのない人はいないでしょう!

現在、5階建ての館内では、教育資料の展示や当時の授業風景を再現しています。磐田にお越しの際は見学してみたいかたがたが。



所在地：静岡県磐田市見付2452 開館時間：9時～14時30分 休館日：月曜日

R 食堂

RはロックのR。ロックファンのご夫婦が経営されているカレー屋さんです。店内にはレコードプレイヤーやスピーカーやピアノが置かれていて、壁にはさまざまなアーティストのポストカードやポスターが。美味しいカレーとロックと気さくな人柄のご夫婦と…。私にとって、仕事の合間に大好きなものに囲まれて過ごす「R食堂」さんでの時間は、何物にも換え難いものです。

「R食堂」さんには、地元の素材を使用した魅力的なメニューがたくさんありますが、中でも私が大好きなのは「チキンカレー」と季節のラッシー「アップルシナモンラッシー」。磐田名物のオモロと呼ばれる煮込んだ豚骨の入った「おもろカレー」もありますよ。磐田にお越しの際は、美味しいカレーとロックを味わいに、ぜひお立ち寄りください!



所在地：静岡県磐田市富丘182-3 TEL 0538-33-8383
営業時間：ランチ11時半～13時半L.O. デイナー18時～21時L.O.
定休日：火曜日・第3水曜日

地域会だより

<静岡>

- 1/15 1月定例役員会(拡大)
- 1/23 建築関係団体新年会の共同開催
- 2/3 静岡県災害対策士業連絡会開催の情報・意見交換会に出席
- 2/17 静岡県建築文化研究会講演会の共同開催。講師：伊礼智氏
- 2/27 東部持出席役員会・建築ウォッチング
- 2/27 東海支部役員会(静岡地域会持出席役員会)・懇親会
- 3/12 3月定例役員会(拡大)
- 4/27 2015年度通常総会

<愛知>

- 1/9 建築八団体新年互礼会
- 1/13 総務委員会
- 1/13 愛知県設備設計監理協会新年互礼会
- 1/16 役員会、CPD講習会・新年会 ※詳細はP14に掲載
- 1/19 <公共建築設計懇談会>
- 1/20 プリテン委員会=支部会報委員会
- 1/21 支部大会実行委員会第4回
- 1/22 事業委員会
- 1/27 JSCA中部支部新年互礼会
- 1/30 愛知まちなみ建築賞表彰式
- 1/30 広報委員会
- 2/2 建築八団体連絡会議 総務委員会
- 2/5 研修委員会

- 2/6 役員会
- 2/13 名古屋都市再開発研究会 まちづくり情報交換会
- 2/14 建築見学日帰りツアー 2015 一忘れられない建築—in京都
- 2/18 法人協力会委員会
- 2/23 支部大会実行委員会第5回

<岐阜>

- 1/23 平成26年度 第7回 役員会・新年会
17:30～18:10(役員会) 18:10～20:00(新年会) 場所：喰なべ
2月予定 平成26年度 第8回 役員会
場所：ハートスクエアG 小研修室
- 3/10 視察研修旅行 8:00～20:00予定
場所：御前崎・中部電力浜岡原子力発電所
- 3/14 「第14回ぎふ建築・生活・芸術系学生・生徒優秀作品展」(JIA岐阜地域会共催) 時間：12:30～16:30 場所：じゅうろくてつめいプラザ

<三重>

- 1/16 第7回例会(総合文化センター)
- 1/24 みえ歴史的町並み防災・復興研究会 幹事会/第2回公開研究会 出席
- 1/25 伊賀市の賑わい創出にむけて(第1回)～課題と可能性を探る～「坂倉準三学習会」 出席
- 1/26～29 土法改正 業務報酬基準に準拠した契約締結の徹底に関する要望三会にて行政機関へ訪問(三重県、桑名市、四日市市、鈴鹿市、津市、松阪市、伊勢市)
- 2/7 建築文化講演会 講師：三分一博志氏(アスト津 アストホール)

ものづくりへの情熱とこだわり

法人協力会通信⑩

<愛知>

小玉真澄 | ㈱岡村製作所 中部支社市場開発室



1945年、横浜市磯子区岡村町。航空機製造の技術者が資金を持ち寄り「協同の工業・岡村製作所」がスタートしました。当時需要の高かったスチール家具の生産が軌道に乗ると、技術者たちは再び「動くもの」の開発に情熱を傾け、国内初のトルクコンバーター（流体変速機）の開発に成功します。1957年に東京日比谷で開催された第4回全日本モーターショーで国産初のFFオートマチック車「ミカサ」がデビュー。ボディーには航空機の薄板加工技術が、シートや内装には家具製造の技術が生かされ、生産はすべて自社で行われました。1960年、家具づくりに専念するため製造が中止されるまで、数多くの「ミカサ」が世に送り出されました。創業以来、一つひとつ製品の中に流れているのは、ものづくりへの

情熱とこだわり。「一流の製品をつくりたい」というその遺伝子は現在も脈々と息づいています。

1963年には店舗用陳列器具を開発、スーパーマーケットが普及していく過程で順調に生産を伸ばしました。1971年にスチールパーティション、1975年にスライディングウォールと建築の高層化・多様化に対応する製品を開



ミカサ

発するなど、さまざまな製品に創業時の遺伝子が受け継がれています。

また、「クオリティデザイン」「エコデザイン」「ユニバーサルデザイン」の3つの観点から上質なデザインで社会に貢献することをポリシーとして、著名デザイナーとのコラボレーションも行っています。2002年に発表したメッシュチェア「コンテッサ」は、イタリアのジウジアーロ氏との協業により世界各国から高い評価を得ました。

JIAの皆様とは、弊社製品をご理解いただけるよう交流に努めてまいりますので、今後ともよろしくお祈りいたします。

●株式会社 岡村製作所 中部支社
〒450-6020 名古屋市中村区名駅1-1-4 JRセントラル
タワーズ20階
TEL 052-551-3170 FAX 052-551-3174

編集後記

●この後記を執筆するにあたり、真っ先に脳裏に浮かんだ記事が東海支部役員会報告でした。支部財政がこれほどまでに逼迫し、現状では1～2年で財政破綻をきたす。収入を増やし、支出を縮小する。そのためには、「ARCHITECT」の隔月発刊も検討。そんな内容が報告されています。そもそも、東海支部の会員にとって「ARCHITECT」とはどんな存在だったのでしょうか？ 私自身はJIAの動向のみならず、「自作自演」や「東海とっておきガイド」では、会員の私生活や動向が垣間見えて、自分と照らし合わせながら楽しく拝読してきました。毎月の「ARCHITECT」を楽しみにしている会員の方々もたくさんいらっしゃると思いますので、より多くの意見をいただけたらと思います。

(西川光広)

●「東北からのメッセージ」、羽島達也さんの

「逃げ地図」の記事を拝読しました。東日本大震災以降、自分の環境や建物に求める安全安心への意識が格段に高くなりました。多くの犠牲者が出た甚大災害での教訓として当然のことといえます。耐震強度や津波への不安、市町村の液化化や津波避難のハザードマップなど有事を想定して情報収集すると、日常備えることの大切さを再認識させられます。わが町豊橋市の電柱には海拔表示（10m以下）があります。生活する街に津波が押し寄せたら想定外、逃げるしかありません。海岸沿いの住民の漠然とした危険の可視化により、速やかで冷静な避難行動が可能になると思います。安全な街づくりに結びつく「逃げ地図」の有効性が評価されて全国に普及することを願います。

毎号無意識に読む「ARCHITECT」の編集後記に初投稿させていただきました。役員でなければ会員として活動や交流の機会も少ないのでJIAの活動や組織の動向を知るうえで当該の重要性を改めて知る機会となりました。紙

媒体を読むことは好きなのですが、逼迫する会計状況により、内容や刊数削減が検討されています。意見や議論では解決できない現実を皆様にもまず知っていただきたいと願う次第です。

(伊藤彰彦)

ARCHITECT

第318号

発行日 2015.3.1 (毎月1回発行)

定価 380円 (税込み)

発行責任者 石田 壽

編集責任者 牧ヒデアキ

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703

TEL (052) 971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http://www.jia-tokai.org/